

---

# オーダーメイド異伝 パラレル・パラレル

zens

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オーダーメイド異伝 パラレル・パラレル

### 【Nコード】

N5697C

### 【作者名】

zens

### 【あらすじ】

オーダーメイドの番外編の寄せ集め、終わることのない物語。ラブコメだったりそうじゃなかったり。温い日常もありだと思おうのです。

## Phase 1..ラブコメにならない話

俺は、有栖 景（ありす けい）。普通の高校2年生だ。

いつものように、幼馴染の恵麻と登校するはず・・・だった。

だが、この日は何かが違っていた。

そして、それが、始まりの合図でもあったのだ。

ちょうど家を出ると、恵麻に会ったのでおはようといつものように声をかけた。

だが、まるで時間の流れが違うかのように恵麻は少し経ってからぼんやりとした表情で俺を見た。

「あっ・・・おはよう・・・でも・・・よく話しかけられたね・・・。昨日、こっ酷く振ったくせに・・・」

俺はあまりのことに、何も言えずにその場に立ち尽くす。

一体、恵麻に何があったのか。いつもとは違い、目は真っ赤な上に、目の下の隈もひどい。その目は俺を見ているようで見ていない。

だが、恵麻は一通り言う何事もなかったように行ってしまった。

俺は恵麻に声をかけることもできずに、その場に立ち尽くした。・・・

・俺が何をしたらって言うんだ？

廊下を歩きながら、俺は自然と溜息が出る。何だか今日は変だ。

先ほども、俺に金を貸してくれという奴がいたので断ったら、殴り

かかられた。相手は3人だったが、たまたまいた神代が助けに入ってきたこともあって、振り返りにすることが出来た。

・・・一体、何なんだ？

俺は今朝のショックを抱えたまま教室へと入った。

すると、いつものように幸樹が俺に挨拶をしてくる。

「よう、景。おはよう」

「幸樹、おはよう。由真もおはよう」

俺は、いつものように幸樹に挨拶をし、由真にも挨拶をする。

だが、由真はいつものように挨拶はしてくれはしなかった。

「・・・ああ、おはよう。・・・うわっ、あいつが話しかけてきたんだけど。それでさ・・・」

・・・俺、今日無視されているような気がするな。由真は嫌そうな顔で仕方なしに挨拶をすると、また友人との会話に戻る。

だが、その顔には少しかりの驚きが含まれていたように思えた。

俺が黙っていると、幸樹は可笑しいものでも見るような目で言った。

「・・・」

「なあ、景。お前、何で上総野なんか挨拶してるんだ？お前、知り合いじゃないだろ？」

俺は、幸樹の言葉にしばらく言葉も出なかった。

・・・何を言ってるのか分からなかったからだ。

「幸樹、お前呆けたのか？毎日、皆で会話していたはずだぞ？」

「景、お前・・・大丈夫か？俺ら、上総野なんかと話したことない

し、藍羽なんかとも話したことねえな」

幸樹の言葉は、納得はしがたいもののよく考えれば真実味のあるものだった。

だから、由真も恵麻も俺と話もしないのか……。恵麻も由真とは話をしているが、俺たちには全く話しかけてくることもない。

でも……。そうだとしたら一体ここは何なんだ？

夢か？それとも、今までが俺の見ていた夢だったのか？考えれば考えるほど、訳が分からなくなっていく。

「……夢であるように、願うしかないか」

そうして俺は憂鬱な気分で午前中を過ごしたのだった。

「景、晃。飯行こうぜ」

幸樹の呼びかけに俺たちは3人で食堂へと向かった。

その途中、見知った顔がこっちに向かってくるのに、俺は気付いた。……美玖と梓依か。こいつらも、きっと嫌っているに違いない。

「こ、こんにちは。有栖先輩」

「やっほー、景先輩」

普通に挨拶をしてくる2人に俺は思わず面食らう。そんな俺を見た梓依が、冷めた口調で言った。

「いつまでもそんな間抜け面でいいですよ。はい、これ。ジュース買って来て、早く」

「は？」

「何？その反抗的な態度は。全くいつも通りにパシリやってればそれでいいんだよ」

俺に120円を渡すとジュースを買って来いと言う梓依に俺は、朝からのイライラが爆発してしまった。

それに妙に高圧的な態度が気に食わない。

俺は、120円を梓依の手に叩きつけて返すと胸倉を掴む。相手が女だろうが、そんなことは関係ない。

「ひっ・・・」

「・・・幸樹、晃。先に行って席取って置いてくれないか」

梓依が怯えた目でこっちを見ているが、そんな目をされた所で今の俺が可哀想だとか思うことはない。

幸樹と晃が行ってしまうと、その掴んでいた胸倉を離す。

「ひ、ひどいです。女の子に暴力を振るうなんて最低です。やっぱりあなたは最低です！」

「なら、最低だという前にきちんと妹の教育でもやり直すんだな」

俺は、面倒な上に腹もすいてきたので、そう言い切ると啞然とする双子を無視して歩き出す。

・・・俺何やってるんだ？あいつら相手にキレたりして・・・。

思い返すと、俺は急に自分の行動が恥ずかしくなった。

「大丈夫、梓依。でも、今日は有栖先輩の様子が変です。いつもはもっとおどおどしてて」

「うん、それに私たちのパシリだったのに……。全く役に立たないね」

「うん、そうだね。使えないパシリはいらないよ。誰か新しい人探そうね」

「景、こっちだ」

「悪いな、幸樹、晃。待たせて」

俺は食堂に着くと、食券を買い、いつものように定食を頼む。

そして、幸樹たちのいる机へと座る。

どうやら、俺が来るまで待ってくれていたようで、まだ何も手をつけていないようだった。

「いいってことよ。これでも、お前の友達なんだぜ。でも、今日のお前はいつもとは全然違うな。何だ、ついにキレたのか？」

俺が席に座ると、いつもよりも少しだけ俺に対して親切な幸樹は、不思議そうに俺を見る。

キレたことは事実だが、いつもの俺に変わりはないと言うと、何故か考え込む。

すると晃が、おどおどと話し始める。

「も、もしかして……。違う人なんじゃないかな。もう1人の自分とか」

「もう1人の自分？」

「そう。パラレルワールドって、景は信じる？」

晃の話に思わず俺は笑い出す。周りの奴が何だと言わんばかりにこっちを見るが、俺は気にもしない。

いきなり真面目な話を笑われたからだろうか、晃はしょんぼりとした顔になった。

・・・晃はこんな奴じゃないはずなんだが。俺は晃を見てそう思う。それに幸樹も、元からいい奴ではあるが、俺を待っていることなんてせずにさっさとたべているはずだ。

「晃、その話もう少し聞かせてもらってもいいか？」

俺が、晃からもっと詳しく話を聞こうとしたときだった。

甲高い笑いがこっちに近づいてくるのが分かった。

すると、幸樹と晃の表情が硬くなるのが分かった。・・・あんまりいい人物が近づいてきたわけではなさそうだ。

その声は、俺の背後に來ると、妙に耳障りな声で話し始めた。

「あら？ 愚民の皆さん、こんにちは」

幸樹たちは挨拶を恐る恐るしているが、俺は振り向くことなく食事を取り続ける。

・・・愚民って、今時そんなこと言う奴がいるんだな。ネットの影響か？ 思わず、内心で嘲笑する。

いつまでも経っても反応を示さない俺にイライラしたのだろう。後ろから、別の女の声が響く。

「あんた、どきなさいよ。霧生様が座りたいとおっしゃっているのにどかないとは何事？」

「そうよ、そうよ」

俺はいい加減鬱陶しくなって振り向くと、これまたご丁寧にも、腕



を組んで踏ん反り返る衣先輩と明月院さん、壬生さんがいた。  
ちなみに、相槌を打ったのが壬生さんの方だ。

思わず噴出してしまったが、何も食べていなくて良かった。俺が笑  
うと後ろを見なくても明らかに嫌悪感丸出しの空気が分かる。

俺は、いい加減この世界にも慣れてきたようで、もうここはいつも  
の世界とは違うんだと確信する。

そうでないなら、恵麻たちの性格がここまで変わったりするわけが  
ない。

だが、もし、そうだとしたら・・・こんな所にいる必要なんてある  
のか？

俺は自問自答を繰り返す。恵麻たちとは全く仲は良くはない。それ  
は寂しいことだ。いつも、一緒に笑っていた友人がいないのだから。  
だが、この世界ではそれが当たり前だ。面倒だな、そう思ったとき、  
目の前の2人に気付いた。

・・・いや、あるか。まだ、幸樹たちがいるからな。

「言いたいことはそれだけか？」

「それだけ？ 全く、下賤の者は高尚な者の言葉が分からないのです  
ね」

そう言って、腰巾着と高笑いをする衣先輩の声が鬱陶しい。

この際言いたいことは言っても構わないよな。正直イライラする。

「悪いな、俺もあんたみたいな高尚な人間の言葉は分からないんだ。  
だから、話しかけるな。それに、真に高尚な人間は、どんな人間に  
も自分の意図する所を伝えられるものだろ。あと、お前らがいると  
飯が不味くなる、他を当たってくれ」

そう言うと、俺はもう振り向くこともなく飯に戻る。

しばらく腰巾着が騒いでいたが、衣先輩がその2人を黙らせると、俺の前に立つ。俺は特に目を合わせることなく、飯を食べ続ける。衣先輩は、そんな俺を一瞥すると一言だけ言った。

「随分と態度が大きくなったのね。何が起こったのかは知りませんが、私に逆らうとどうなるか教えてあげますわ」

そう言うと、衣先輩は去って行った。

・・・モーゼみたいな人だな。俺は、先輩の通る道が勝手にできるのを見てそう思った。

だがその日、結局何が起るわけでもなく1日は過ぎていった。

俺は校門前で幸樹と晁と別れると、駅へと向かって歩き出す。その時だった。背後からそっと歩いてくる人影に気付いた。

「・・・」

刺客か、何かか？

俺は、その時本気でくだらないことを考えた。

だが、その人影は俺を追い越すと、俺の前で振り返った。

「こんにちは、景。今日は夕陽が綺麗だよね」

「あ、ああ。ところでお前誰だ？」

いきなり訳の分からないことを言う女に俺は呆気にとられる。

だが、相手は俺のことを知っているようだが、俺はそもそも知らない。

俺の言葉に、目の前の不思議な女は少し残念そうな顔で言った。

「そっか・・・、覚えてないかあ。うん、でも教えないよ。思い出すまで待つてるよ」

「ちょっと待て」

俺は引きとめようとするが、その女は下り坂を勢いよく駆け下りて行ってしまった。

追いかける間もなく、俺はまた1人になる。

・・・結局、誰だったか俺には分からなかった。

家の前に来たとき、俺はふと思った。

朝は、エリスがいなかったな。と言う事は、この世界にはエリスはいないということか。

俺は少し残念な気もした。エリスがどう変わるのか、少しだけ興味があつたからだ。

まあ、それはいいか。

邪念を振り払い、俺は家の扉を開ける。

「ただいま」

「おかえりなさいませ、景様」

そこには、いつもと何も変わらないエリスがいた。

「エリスなのか？」

「はい、そうですよ。今日の景様は、少し変ですよ」

エリスはそう言って、微笑をこちらに向ける。

・・・ここは変わっていないんだな。

俺は、何も変わっていない家に戻ってきたのだと心底ほっとする。

エリスは、リビングへと戻ろうとしていたが、あっ、と声を上げると再び戻ってきた。

「ところで、景様。今日はどちらに行っていたのですか？」

「どこって、学校だぞ」

何を当たり前のことを聞いているんだ？俺がそう思ったときだった。エリスの目つきが変わった。

「本当に景様は、学校に行っていたのですか？」

「え？エリス、何を言っているんだ？」

俺が、突然のエリスの豹変に驚く中、エリスは言葉をさらに続ける。

「・・・何だか怪しいです。もしかして、学校をさぼって遊んでいたのではないですか？」

「エリス、どうした？今日は何だか変だぞ？」

「変なのは景様の方です。急に話を逸らしたりして、やっぱり怪しいです。何か私に隠し事をしてますね」

・・・何だか目が据わっている言うか、死んでいると言うか。それに、淡々とした言葉遣いが逆に不気味だった。俺は、エリスを

心配するが、俺の話を全く聞く気などないのだろう。  
俺が黙ってしまうと、さらにエリスは追及してくる。はっきり言って、悪循環だった。

「黙っていたら、私分らないです。・・・」

「・・・悪いエリス。俺もう寝るからって母さんに言っておいてくれないか？」

俺はエリスが話を続けようとするのを遮ってそういう残すと、脱兎の如く階段を上り、自分の部屋に駆け込む。

そして、鍵を閉めると、そのままベッドに横たわる。

「・・・エリス、ウィルスに感染にでもしたのか？」

俺は、1人ベッドの上で天井を見上げながら言った。原因がそれくらいしか思いつかない。

幸いエリスは、2階までは追って来なかったようだ、そう思った時だった。突然、部屋の扉がノックされた。

ただのノックのはずなのだが、俺は心臓が飛び出るくらいにびくつと体が反応した。

「景様・・・どうして私から逃げるんですか？私はただ景様とお話  
がしたいだけです。聞こえているんですよね、ここを開けてく  
ださい」

「・・・」

エリスであれば、ドアを蹴破るくらい造作のないことだろう。だが、  
あえてドアをノックするだけに留めるエリスの行動に俺は寒気を覚  
えた。

目を閉じれば、きっと寝れるはずだ。そう思って目を閉じてみても、

全く眠くならない。

エリスの声と、ドアのノック音が断続的に聞こえて眠れないのだ。

「景様、どうして開けてくれないんですか？もしかして、女性を連れ込んでいるんですか？」

「・・・」

既に俺が部屋に立て籠もってから6時間は過ぎただろうか。一向にエリスは止める気配がない。

俺は、すっかり参ってしまっ言い返す気力もない。だが、ようやくと言った方がいいのだろうか。

ぐにやりと世界が歪むような、そんな不思議な感覚を感じたと思うと、いつの間にか俺は眠っていたのだった。

俺は、意識を手放す前に願った。

・・・きつと、明日には元通りだよな。

## Phase1..ラブコメにならない話(後書き)

まずは、読んでくださった方ありがとうございます。

これは、オーダーメイドの方が20000アクセスを達成した記念に勝手に自分で祝って、もしも、主人公がヒロインに嫌われていたら・・・をコンセプトに書いたものです。

・・・少なくとも、これじゃラブコメが始まらない。恋愛小説にはなるかもしれませんが・・・。

ノリだけで書いたので、大変読みづらいと思います。

・・・いつも読みにくいかもしれませんけどね。

本編は明日朝に更新します。

## Phase 2..ラブコメになるかもしれない話

また、朝がやって来た。

あの少し味気のない学校へと行って、毎日を過ごすのだろうか。

そう思うと、俺は少しだけ嫌になる。

だが、ここでもエリスや家族は変わっていなかったし、幸樹や晃だっている。

俺はまだやっていける。

だが、そんな俺に遠くから声が響く。

無理、無理。止めたほうがいい。

それは恵麻の声であり、由真の声でもあった。俺を嫌っている皆の声だった。

何だか腹に来る言葉だった。何で頭や心が痛まずに腹の辺りが、こう痛い・・・いや重い・・・。

「起きてよく、遅刻しちゃうよ」

誰かが俺の体を揺さぶっている。



今日は一体何曜日なんだ？

ぼんやりとした頭でそんなことを考えていると、いきなり俺は床に落とされた。

一瞬息が出来なくなるが、おかげで意識だけは覚醒することが出来た。

「・・・恵麻か。おはよう。ところで何か用か？」

俺は昨日の事もあるので、素っ気無く挨拶する。

「・・・そもそも昨日の恵麻なら部屋に入ってくるとはとても思えない。

もう1度よく顔を見るが、それは恵麻に変わりなかった。

俺が、床に寝転んだまま恵麻を見上げていると、扉をノックする音がしてエリスが部屋に入って来た。

「おはよう、景君。早く準備しないと遅刻しちゃうよ」

「あ、ああ・・・」

「景様、恵麻様、おはようございます」

「おはよう、エリス」

「おはよう、エリスちゃん」

「・・・昨日の今日だ。何か企んでいるのではないか、そう疑いたくもなる。

だが、にこのこと微笑む恵麻は昨日と同一人物なのかと疑いたくもなる。

そこで、俺は1つ聞いてみる。

「なあ、恵麻。昨日、お前1人で学校行ったよな？」

「ええっ！？ 景君と私はいつでも一緒に登校してるでしょ」

・・・昨日とは違う場所ということか。  
とりあえず、俺はそのことを知るとほっと胸を撫で下ろす。  
だが、ほっとしたのも束の間、エリスは俺にとっては最悪の状況を告げる。

「あの、景様。もう7時20分ですよ」  
「なっ!？悪い恵麻。先に行ってくれ」

俺は恵麻にそっくり残すと、下の階へと降りていった。

「景様、いってらっしゃい」  
「いってきます」

俺はいつものようにそう言うと、家を出る。  
すると、恵麻が外で待っていた。俺に気付くと、満面の笑みで小さく手を振る。

「恵麻、先に行ってくれて行っただろ。恵麻も遅刻するぞ」  
「大丈夫、走れば間に合うよ」。ちよっと、情緒がないけど・・・」  
「そうか・・・なら走るぞ」  
「あっ、待ってよ」

そう言う俺は、走り出す。  
恵麻も慌てて俺の後について来る。

駅まで走ったおかげもあって何とか間に合いそうな電車に乗ること

が出来た。そのせいで、少し汗をかいてしまったが、それは仕方のないことだ。

そして、俺たちは学校の最寄り駅で降りる。すると、由真と幸樹が駅前で待っていた。

「景、恵麻、おはよう」

「ようっ」

俺たちを見つけると、こちらへ駆け寄って挨拶をしてきた。

そうやら、本当にここは別の場所のようだ。

・・・いつもの世界に帰ってきたんだ、そう思うとやはり嬉しい。

「おはよう、由真ちゃん、寿々林君」

「おはよう、幸樹、由真」

俺たちも挨拶をすると、並んで坂道を歩き出す。

坂を登っていると、恵麻が俺にもじもじとしながら話しかけてきた。

「ねえ、景君。今週の日曜日、暇かな？」

「特に用事はないな」

「それなら、遊園地に行かない？ チケット2枚貰ったんだけど、一緒に行く人がいないんだ」

恵麻は、相変わらずもじもじ、そわそわしながら時折俺から視線を逸らしたかと思うと、ちらちらと上目遣いにこっちを見たりする。あまりの落ち着きのなさに、俺はトイレに行きたいのかと真面目に思う。

だが・・・これはデートの誘いなのだろうか。そう考えたときだった。

「恵麻、それって抜け駆けじゃない？　だったら、あたしも行く」

「ええっ!？」

「当然だよ。そんなアンフェア許されないんだから」

・・・何だ、この展開。こういうのは、たぶんラブコメって言うんだよな。

恵麻と由真の言い争いを聞いて、勝手にそう思う。

その時だった。1台の高級そうな黒塗りの車が俺たちの近くで止まった。

そして、中から美玖と、梓依が顔を出す。

「景先輩、おはようございます」

「景先輩、おはよう。先輩、折角だから乗っていこうよ」

・・・こいつらも性格が戻っているのか？　何か違うような気がする。その油断がいけなかったのだろう。

俺は、近づいてきた黒服の男に抱えられると車の中に放り込まれる。すると、車はすぐに発車する。

「あ!？　景君を返して」

「こらっ!　この泥棒猫が!」

少し遠くから、恵麻たちの悔しそうな声が響いてきた。

・・・叫んでないで歩かないと遅刻するぞ？

違う、そうではない。人の心配は2の次だ。まず、俺は何で車の中に放り込まれているんだ？

「・・・それに痛くないな」

だが、放り込まれた割には、痛みを感じないと思ったら、美玖がクツションになっていたようだ。

・・・何だ、妙にこの柔らかい感触は？

「・・・せ、先輩・・・だ、大胆です」

「・・・っ!？」

・・・とりあえず、現状を確認すると俺の頭のある位置は美玖の胸の前だった。

何故だか、抱きしめられているが、恥ずかしいことこの上ない。

慌てて俺は美玖から離れる。何だか、美玖が名残惜しそうにしているが、気を取り直したのか、また俺にくっついて来る。反対側に逃げようとするが、梓依が反対側でくっついていてるので、それも叶わない。

「えへへ」

梓依も何だか幸せそうな顔をして俺にくっついていた。

結局、学校に着くまでの数分間。

俺は、そのままの状態だった。学校に着いたと言われても、美玖も梓依もしばらくは離そうとしなかったが、同時に離すということで決着がついたようだ。

「・・・やっぱり、外はいいな」

俺は、狭苦しい車内の出来事を振り返り、そう言った。

「そうですわね」

ふと、横で同じ様に伸びをしている女が目に入る。

思わず、俺はその女から飛びのく。とりあえず、昨日とは違うようだが、昨日の印象が強すぎて、素直に受け入れにくい。

「・・・何やってるんですか？衣先輩」

もっとも変化の激しかった衣先輩に俺は恐る恐る聞く。

すると、衣先輩は昨日とは違って、少しばかり低い声で言った。

「何って・・・伸びですわ」

・・・何だか、昨日と別人過ぎて調子狂うな。

そんなことを考えていたからだろうか、衣先輩は心配そうに俺の顔を覗き込む。

「・・・あの・・・顔が随分と近いですね」

「ええ、近づけているのよ。真っ赤になって可愛い」

・・・誰だ、この女。俺は、衣先輩の皮を被った別の人物じゃないのかと思うにはいられない。

依然として、至近距離で俺の顔を見続ける衣先輩を見て、そう思わずにはいられない。

その時、俺のわき腹に鋭い痛みが走った。

「・・・」

「景先輩」

振り返ると、梓依が俺に笑顔を向ける。俺の名前を呼んだだけなのだが、何だか色々な意図が含まれている気がした。そして、俺から視線を外すと、衣先輩と対峙する。

「おはようございます、霧生先輩」

「あら、四条暇さん。おはようございます。でも、四条暇だと私と美玖のどちらか分からないんですけど？」

とても爽やかに挨拶をしているようだが・・・腹の探り合いだよな、これは。

2人が睨み合いを続けていると、いつの間にか俺の横には美玖がいた。

そして、美玖は少しの間何かを考えると、決心をしたように俺に言った。

「あ、あの・・・日曜日、お暇でしょうか？もし、空いているようでしたら、そ、その・・・一緒に映画でもどうでしょうか？」

美玖のその言葉に今まで睨み合っていたはずの2人が、急に会話に割り込んでくる。

「あ、美玖、ずるいよ。景先輩は、私と遊びに行くんだよ。ね？」

「いいえ、私と遊びに行くのですわ」

・・・いつ、約束したんだ？そんなことを。

俺は、今までこういう状況に陥ったことはないので、どう対処していいのかと困る。

いつの間にか、校門前には俺たちを取り囲むように野次馬が出来ているし・・・。

仕方ない、全部断ればいいか。面倒だが、それの方が幾分ましだろう。そう思って、俺が言おうとした時だった。

にわかに周りの野次馬が後ろを振り向き始めた。外から誰かが来ているようで野次馬が勝手に道を開けていく。

そして俺たちの前に現れたのは、この学校で知らない人はいない3大歌姫の1人の明月院さんだった。

彼女は、俺たちを見据えると、一息おいてから言い放った。

「それなら、勝負事で決めましょう。正当な勝負であれば、文句もないですよね」

・・・全く、厄介なことをしてくれる。

俺は、突然現れてこの場を収めようとする明月院さんには失礼だが、そう思った。

大体、こういう状況になったとき、被害を被るのは中心にいる人物か、笑い担当の人間だ。

ただ俺の周りには、俺の代わりに被害に遭ってくれそうな人物がない。つまり、ここで被害に遭うのは俺だ。

ちよっと待て、そう言いたかった。だが、俺が言う前にまた誰かが乱入してきた。

「景君、大丈夫？」

「景、大丈夫そうだな。全く、お前ら一体何してるんだ？」

恵麻と由真だった。

・・・また面倒なことになりそうだな。そう思う俺の予想は裏切られることはない。

「恵麻さんに由真さん。これから、有栖君の日曜日をかけた勝負をするんだよ」



既に決まったことのように言い切る明月院さん。

その言葉を聞いた恵麻と由真の目の色が変わったのは言うまでもなかった。

・・・やる気なのか？

「ちょっと待て、俺の意見は無視なのか？」

俺は面倒に巻き込まれるのは御免なので、断ろうとするが既に誰も聞いてもない。

溜息をつく俺に、隣にいる美玖は言った。

「が、頑張りますね、景先輩」

・・・この時、俺はもう抜けられないんだと確信した。

ホームルームが終わると、幸樹が話しかけてきた。  
そこで、俺は幸樹と晃にも相談してみる。

「景、お前も大変だな」

だが、幸樹も晃もそう言って、他人事のように笑うだけだった。  
・・・所詮、他人事なんだよな。俺は、また溜息をつく。

「1つ聞きたいんだがいいか？」

「何だ？」

「俺を見てどう思う？」

俺の質問が悪かったのだろうか、幸樹も晃もあまり理解してくれていないようだった。

驚いた後、考え込んでいるようで、会話がピタリと止んでしまった。それから1分ほど経っただろうか。幸樹があまり言いたくなさそうに話を切り出した。

「なあ、景。お前さ、男に・・・興味があるとか言うことはないよな」

「は？」

「「ええっ！？景（君）、嘘だよね！？」」

俺はあまりの衝撃に、言葉が続けて出てこない。

それは、ちょうど俺たちの所へ来ていた恵麻たちも同様だったようだ。慌ててこっちに駆け寄ると由真に肩を掴まれると、上下に揺さぶられる。

「・・・気持ち悪いから、止めてくれ」

「あ、ごめん」

「それに俺は、ゲイじゃない。ノーマルだ、ノーマル」

・・・何で2度も同じ様なことを言わなくていけないんだ。

だが、俺の言葉を皆信じてくれたようで、恵麻も由真もほっとした表情を見せる。

その後、予鈴が鳴るまで、いつものように他愛のない話をしていた。C組の何とかとA組の何とかさんが付き合い始めたといったそんな普通の話だった。

「景君、次の休み時間にまた来るね」

「あたしもまた来るよ」

そう言って2人とも席に戻っていく。

さてと、俺も次の授業の準備をしないとな。

俺は、鞆からノートと教科書を取り出す。

そして何気なしに、その黒いノートを見た。何だか歪な文字でこう書いてあった。

「・・・デス・・・ノート・・・」

俺は、思わず中身を見てしまう。

表紙の文字とは違い、綺麗な文字で知らない人の名前が何人か書かれていた。・・・何だか、偽物だと分かっていても、気持ち悪いな。このままにしたらどうなるのかという好奇心はあったが、書き込まれた人が迷惑だよなと思い、文字を消しゴムで消しておく。

・・・消えないだろうな、そう思っていたのだが、あっさり消えてしまったので、これは誰かの悪戯だなと思う。

・・・仕方がないから、他のノートで代用するか。

今日は、他に古文と数学、国語があったな。

一番使っていないのは、国語だったな。俺は、鞆から国語のノートを取り出した。

そして、またノートの表紙を見る。

「・・・ボクノート」

・・・中身は、綺麗な文字で歌詞がびっしりと最後のページまで書

いてあった。

俺は黙ってそのノートを鞆へ戻す。

・・・あとは、2冊か。

俺は、適当に1冊を取り出す。

・・・何だか、分厚くないか？俺は、その手に取ったものを見る。

「・・・ノートン・・・。これはノート違いだな」

また、俺は黙って、鞆の中にそれを戻す。

そして、最後の1冊を取り出す。

「・・・これは普通のみたいだな」

表紙を見ると、数学と書いてある。あとは、中身が残っていることを析るばかりだ。

俺は、1ページ目をめくってみる。

「・・・何々。ヒロインの攻略方法？」

俺の鞆の中は一体どうなっているんだ。おかしい物しか出てこないぞ。

俺は、何だか人に見られてはいけない気がするノートを仕舞い込む。そして、中身を取り出しながら確認するが、他にはおかしいものは入っていないかった。

しばらく寝るか。俺は授業をサボって寝ることを決めると、そのまま夢に落ちた。

## **p h a s e 2 ..ラブコメになるかもしれない話（後書き）**

本編にはまだないと思われるラブコメっぽい話です。

今回も読んでくださった方、本当にありがとうございます。

### Phase 3..まだ始まらないラブコメ

「ねえ、起きてよ」

誰かが、近くで俺を呼んでいる。

そして、その声と共に俺が揺れる。

・・・地震か？いや、違う。俺は寝ていたんだ。ということは1時間目が終わった頃か。

普段から寝起きのあまり良くない俺だが、誰かに揺さぶられて目を覚ました。

そして、俺は、その揺さぶった人に聞いた。

「・・・今、何時だ？」

「景君。もうお昼だよ」

・・・恵麻の声か。ん？

「なっ！？もう昼なのか？」

俺は、一気に眠気が吹き飛ぶ。時計を見るが、どう見ても昼休みの時間だった。どうやら俺は1日の半分を寝て過ごしてしまったらしい。

そんな俺を、恵麻は子供でも見るような優しい目をして見ていた。

「気持ちよさそうに寝てたから、起こすのを躊躇しちゃったよ」

・・・俺疲れてるのか？今日は早く寝て疲れを取らないといけない

な。

俺は、既に家に帰ったらすぐに寝るつもりだった。

だが、その前にもう昼ということは食堂に行かないといけない。あそこはそれなりに席数があるとは言え、早く行かないと埋まってしまうのだ。

「幸樹、晃。今日は食堂に行くのか？もし、行くんだった一緒にどうだ？」

俺はいつものように幸樹と晃を誘う。

恵麻はいつも自作の弁当だし、由真は早弁をして昼休みはバスケットをしていることが多い。

必然的に昼は男だけになるということだ。

だが、いつもならすぐに一緒に行くはずの2人が返事しない。

ただ俺を複雑そうな顔をして見ているだけだ。

・・・何か用があるのか。俺はそう判断すると、腹がすいていたので立ち上がる。

「何だか用事があるみたいだから、俺1人で行くな。じゃあ、またあとでな」

そう言って、俺は教室をあとにしようとする。

だが、恵麻が俺の前に回りこんできた。

「ちょっと待って、景君。私と一緒に来てほしいところがあるんだけど、いいかな？」

「いや、俺は食堂に行きたいんだが」

「それじゃあ、今すぐここで選んでよ。あたしか、恵麻か」  
「は？」

思わず間拔けな声が口から出てしまった。そういえば、朝、勝負がどうか言っていたよな。

あれは、冗談じゃなかったのか？俺は、恵麻と由真を見る。

・・・冗談ではないようだった。

目がいつもに比べて真剣味を帯びているし、それに俺が見ると何故か顔を赤くする。

「・・・なあ、1つ言いたいんだが・・・」

俺がそう切り出したときだった。教室の扉が開くと、誰かが入ってきた。その人は真っ直ぐこちらへと向かってくる。

俺はその顔を見ると、顔をしかめてしまった。

・・・また、面倒なことになりそうだと。それに、俺の言いたいことを最後まで言わせてくれ。

「藍羽さん、上総野さん。準備は出来ていますわ。有栖さんも、そんなに時間は取らせませんので来て下さい」

「衣先輩。それは、1個人としてお願いですか？」

「いいえ、生徒会権限です」

・・・おい、そんな所で権力を使うか？どこの恐怖政治だよと思うが口にはしない。

生徒会に逆らうと今後の学生生活に影響が大きいのも事実なのだから。

特に、生徒会副会長にして新聞部部長のあの人がいるからな。迂闊に、余計なことは出来ないのだ。

それに俺も、エリスの件では世話になっているからな・・・。  
校内であまりエリスの件が騒がれないのは、単にこの生徒会の2人、



特に希望先輩による所が大きい。

「分かりました。でも、そこまで時間はないですよ」

俺は仕方なしに、生徒会室へと向かうのだった。

学校中に、新聞のネタとしてあることないこと書かれるのは、さすがに嫌だからな。

生徒会室には、既に何人かいるのだろう。

中からは、数人の話し声が聞こえてくる。

確か、朝、明月院さんが言っていた勝負とやらを行うのだろう。

これは、勘違いをしてもいいのだろうか？それとも・・・ドッキリカメラでも仕組まれているのだろうか？

もし、夢ならば、これが俺の望んだ世界ということになる。心の表面でなくとも、奥底ではそう願ったからこうなったのかもしれない。

「ねえ、景君は・・・どんな女の子がタイプなの？・・・景君、何だか難しい顔してたよ」

急な恵麻の質問に俺は答えることが出来ない。

この世界が、本当なのかと考えていたなんて言えるわけもない。いや・・・そう言えば、いつものように笑ってくれるかもしれない。

「・・・いや、休日はどう過ごすか考えていただけだ」

まあ、言えるわけないか。結局、俺はチキンだったことさ。そんな俺の言葉を恵麻はただ嬉しそうに聞いていた。

由真は、しばらく俺の顔をじろじろと見ていたが、ふっと溜息も取れるような息を吐くと、口を開いた。

「へえー・・・あんたも真面目に考えるようになったんだ。まあ、真面目に考えた上での結論であれば、あたしは景の結論を受け入れるけどね。まあ、本音を言うなら、もちろんあたしを選んでほしいわけだけど」

それに対して、恵麻も言葉が続ける。

「私も景君の意思を尊重するよ。でも・・・私は諦めの悪い子だから、ずっと狙い続けるかもしれないよ」

「・・・恵麻。度が過ぎると、そういうのは世間ではストーカーって言うんだ。よく覚えておけよ」

「ふふっ、そうかもね」

俺の注意にただ微笑む恵麻。何故か、その笑顔が怖いと思ってしまった。

ちょうど会話が途切れたとき、生徒会室の扉を開けて、希望先輩が顔を出した。

「ねえ、3人ともいい加減に入ったら？」

「・・・すいません」

俺たちが話しているせいで、散々待ったのだろう。笑顔がかなり無理している感があった。

慌てて俺たちは、生徒会室へと入った。

中に入ると、そこには生徒会の面々と、朝の騒動に巻き込んだ奴らが居た。

俺たちが中に入ると、こんにちはと言われたので、挨拶を返す。すると、既に先に中にいた衣先輩が、俺たち3人を呆れたような目で見ながら空いているソファアを指差す。

「とりあえず座ってください。話が進みませんわ」

衣先輩の言葉に、他の皆も俺たちを見ながら頷く。

俺たち3人は、大人しくソファアへ腰掛ける。だが、俺たちが座ると、恵麻と由真を交互に指差し、梓依が大声を出す。

「ああっ、隣はずるいよ。私だって座りたいのに。大体、恵麻先輩も幼馴染というポジションを悪用しすぎです。由真先輩も、同じクラスだからってずるいです」

・・・梓依って、こんなに喋る奴だっけ？ああ・・・、どうも他の人格と混同するな・・・。

俺は、梓依の甲高くわめく声にうんざりする。だが、梓依の意見はどちらかというと多数派のようだった。

恵麻と由真を除く皆が頷いている。恵麻たちは不満そうな顔をするが、すぐに何か悪戯を思いついた子供のような表情をする。

・・・何だか嫌な予感しかしないな。そして、俺の予感はいとも簡単に当たってしまった。

「えいっ」

「・・・何してるんだ？」

「見れば分かるでしょ？景、あんた、大丈夫？」

ああ、俺の脳は至って正常だ。だからこそ分かる。おかしいのは、

お前らのほうだ。

俺はその疑問をそのまま恵麻たちにぶつける。

「・・・何故、俺の腕にくっ付く必要がある？」

だが、返ってきた答えもストレートなものだった。

「景君が好きだからだよ」

「あたしも同じく」

「・・・」

俺は今、顔が真っ赤になっているのかもしれない。

だが、言った本人も恥ずかしいと気付いたようで顔を真っ赤にしていた。

「け、景先輩・・・」

「そういうのは、ずるいと思うよ。有栖君」

そんな空気を許さないと言わんばかりに美玖と明月院さんが、俺たちに詰め寄ってくる。

「俺のせいなのか？」

何故だかおれのせいにされてしまっているが、これは俺のせいなのか？

少々理不尽に思えてならない。

そんな俺の考えは表に出ていたようで、今まで介入すらしてこなかった衣先輩が俺のところまで歩いてくると言った。

「有栖さん、あなたがきちんと決めないからこのようなことになる

のですわ」

「決めるというのは・・・」

口にしてから愚問だと俺は思った。この状況なら答えは1つしかないはずだ。

だが、衣先輩は迷うことなく言った。

「そのようなことを私の口から言わせるのですか？・・・有栖さんが誰を好きかということですよ」

だが、言ってしまったから恥ずかしかったのだろう。顔を真っ赤にして、伏せてしまった。

・・・これは、俺のことを好きだと判断していいのだろうか？

「・・・今この場で伝えたほうがいいのか？」

俺は、皆を見ながら言った。

だが、複雑な気持ちがあるのだろう。期待と不安の入り混じった目で俺のことを見ている。

さっきまでの元気はどこに行ったのか、空気が重く皆が誰かが話し始めるのを待っているような、そんな雰囲気だった。

その空気を打ち破ったのは、やはり希望先輩だった。

「ちょっと待った、景っち。そうだよ、思い出したよ。みんな、何のためにここに集まったか忘れてない？」

「「あ・・・」」

・・・ものの見事に忘れてるな。

何人が間拔けな声を出し、慌てて口を押さえる。

希望先輩は、間拔けな声をあげた恵麻や美玖に微笑を向けると、話を続ける。

「今日ここに集まってもらったのは、他でもなく、ここにいる景っちのデート権をかけた一発勝負のためだよ。料理とかスポーツとかも考えたけど、ある程度勝者が限られちゃうから、採用しませんでしたー。はい、ここまでで質問のある人？」

・・・つまり、明月院さんは希望先輩に言われたとおりにしただけということか。

しかし、この人は・・・よくやるよな……。きっと、応じなければ新聞のネタにする気なのだろう。

断らなくても、本人が楽しければそれでいいに違いない。しばらく、生徒会室に沈黙が訪れる。皆、希望先輩のノリについていけない。・・・大人しい性格の奴ばかりだからな。

誰からも手が挙がらずに希望先輩が暇そうにしていると、美玖が思わずお手を挙げる。

すると、希望先輩は待ってましたばかりに、美玖を指差す。

「あ、あの・・・」

「はい、美玖っち」

「・・・あ、わたしのことですね。勝負と仰いましたけど、具体的に何をするのでしょうか？」

美玖の当然とも言える疑問に全員が頷く。

・・・勝負と言っても何をするかによっては止めたほうがいい気がするしな。

だが、希望先輩は胸を張って言った。

「当然来ると思ってた質問だね。簡単に言うてプレゼンかな？ つま

り、景っちと日曜日を過ごしたいという人たちが、どういうデートをしたかというデートプランを発表して、景っちが一番気に入ったデートプランが採用されるってことだよ。でも、難しく考えなくていいよ。あくまで理想程度の物でもいいからね。それで時間が余ったらついでに自分の魅力をアピールしてもいいよ」

「希望、いつの間に決めていたのですか？・・・でも、受けて立ちますわよ」

衣先輩がいち早く、参加表明をすると、恵麻たちも参加を表明する。・・・随分と流されやすいんだな。

それを満足そうに見た希望先輩は、立ち上がると部屋の隅の方から胸に抱きかかえるくらいの箱を持ってきた。

「それじゃあ、早速クジを引いて順番を決めるよ。あ、別にどうでもいいって人は参加しないでね。むしろ、関係ないから帰っていいよ」

・・・さりげなく酷い事言ってるよな、希望先輩は。

だが、俺はふとしたことを思いつき、希望先輩に尋ねてみる。

「俺もプレゼンに参加していいですか？」

「え？・・・景っちはダメに決まってるじゃん」

あっさり断られたか・・・俺が参加できれば、間違いなく優勝できるのにな・・・。

俺は思惑が外れ、がっくりと肩を落とした。元々、期待はしていなかったから、そこまでショックはない。

ここで逃げたとしても新聞に色々書かれるからな・・・。  
俺は大人しく成り行きを見守ることにした。

何も起こらなければいいけどな。



### **Phase 3..まだ始まらないラブコメ(後書き)**

まずは、読んでくださった方、ありがとうございます。

オーダーメイド本編20000アクセス記念として書いていますが、本編とは一切関係のない話です。

世界と登場人物はそのままですが・・・。

20000記念はあと2作ほど続きます。  
お付き合いいただければ幸いです。

## phase 4..あるラブコメの話 前編

結局、俺は大人しく希望先輩と今までの間、空気のような存在でしかなかった深水先輩、蓮華先輩たちと並んで座った。

クジの順番は、由真、梓依、衣先輩、明月院さん、恵麻、美玖の順番になった。

そして、俺の日曜日の争奪戦が始まった。

「ルールは簡単。時間が無いから1人1分間で自己アピールしてもらうよ。審査員は景っちのみ。私は司会進行、浩一と蓮華は……いるだけ?じゃあ、始めよう」

空気扱いされ、いじける2人を俺以外誰も気にしていなかった。・

・結局、空気なのか。あの2人は。

希望先輩がルールを説明すると、由真がいつもとは違い、緊張した様子で俺たちの前に立った。

他の5人は真剣な表情で、由真を見ていた。

「あたしが一番手か……。ま、先手必勝ってことで始めますかね」

由真はやれやれといった顔をしつつも、どこか楽しそうだった。

そして、由真が話し出そうとしたとき、隣に座っていた希望先輩が俺にひそひそと話しかけてきた。

「ねえ、みんなの話を聞く前に聞きたいんだけど……景っちの好みの女の子って、ぶっちゃけ誰?」

「……随分とストレートな聞き方ですね?……実は、希望先輩です」

希望先輩は、自分で企画しておきながら、あまりプレゼンには興味がないようだった。先ほどから、髪を弄ったり、何かの企画書の紙を折ったりして遊んでいる。

俺の隣にいる深水先輩が、青い顔をしている所からかなりの重要書類と推測できる。

希望先輩は、俺を使って暇を潰したかったのだろうが、俺の答えにがっかりしたようでまた髪を弄り始めた。

そうこうしているうちに由真の話が始まる。

「あたしは、一緒にスポーツ観戦に行きたいなあなんて思ってる。あんまり、デートの計画とか考えてないから、一緒に考えたら楽しいかなって・・・なんて」

「・・・他に何かあるか？時間が余ったなら自己アピールをした方がいいのではないか？」

あまり呆気なく終わってしまったので、蓮華先輩が由真に尋ねる。

由真もさすがに不味いと思ったのだろう。少し考えると、また話し始める。

「そんなに時間ないから、仕方ないでしょ。まあ、あたしと付き合いの利点は、そうだねえ・・・。こう見えて、あたし、料理は出来るよ。まあ、家庭的ってやつ？それにほら、健康的でしょ・・・。あとは、そうだね・・・。景もそれなりにスポーツができるよね。だから、一緒にスポーツも楽しめたらいいな」

「はい、そこまで。次は、梓依っちだね」

ちょうど時間通りに終わったようで、希望先輩がタイムアップを宣告すると、由真は他の5人の所へと戻る。

そして、次に俺たちの前に来たのは、梓依だった。

希望先輩が、どうぞと言うと話し始めた。

「私は、景先輩と公園をゆっくり散歩しながらお喋りしたいな。それで、ベンチに座ってお弁当を食べるの。遊園地とかもいいかなって思ったんだけど、景先輩は、そういうの好きそうじゃないって言うたし、私もあまり人混みは好きじゃないから・・・」

梓依の言葉に恵麻の表情がほんの少しだけ変わった。

・・・そういえば、朝に遊園地行かないかって言ってたよな。

梓依は、そんなことに気付くこともなく話を続ける。

「・・・あとは、私の魅力だね？私は、家庭菜園を持ってて、野菜を作るのが好きなんだー。よかったら、今度一緒にどうかな？・・・ころころ性格が変わって付き合いにくかもしれないけど、その分飽きは来ないことを保証するよ」

・・・最後の言葉は、他の5人を見て言っていたが、何か意味があるのか？

何だか梓依と他の5人の間に火花が散っているように思えるが、気のせいだろうか。

梓依が、話し終わると次に俺たちの前に立ったのは、衣先輩だった。俺たちに不敵そうな笑みを見せるが、あの笑顔は大体悪いことを思いついたときの笑顔だ。

・・・嫌な予感しかない。

「衣っち、どうぞ」

希望先輩が促すが、衣先輩は何も話し始めない。

ただ、さきほどもから不敵な笑みを浮かべているだけだ。

そして、30秒経っただろうか。ふと、衣先輩が俺たちから視線を外し、他の5人をチラッと見やった。

「では、私、霧生 衣の話を始めますわ」  
「・・・もう30秒以上経ってるけどね」

希望先輩の冷たい突っ込みにも動じることなく、衣先輩は淡々と話し始めた。

「私は思うのですわ。好きな方と2人一緒にいればデートですわ。大事なのは、場所ではなく、2人の時間です。だから、私はあえて理想のデートは言いません」

先輩の話が終わるとその場が一気に白けた気がした。

本人はいいことを言ったと思ってるのかもしれないが、俺の隣の希望先輩は特につまらなそうだ。

椅子に座ったまま背伸びをすると、次に欠伸をしてからだるそうに言った。

「衣っちの話、つまらなくて涙が出るんだけど」

・・・直球だな、おい・・・。

あまりに言い過ぎたせいだろう、衣先輩がゆっくりとこちらへと歩いてきた。俯き加減なのせいで、表情がよく分からないのだが、たぶん怒っているに違いない。

隣の希望先輩もさすがにまずいと思ったようで、慌てて言い直す。

「あ・・・いや・・・今のほんの冗談だって・・・。お、怒らない、怒らない・・・スマイルだよ、ね？」

「申し訳ございません、現在スマイルは売り切れですわ」

だが、衣先輩は無表情で言い放つ。あまりに抑揚のない機械的な言

い方に、部屋の温度が下がったようにすら錯覚してしまう。

・・・キレやすいんだよな、衣先輩は。俺は他人事のように思う。何故なら、他人事なのだから。

そう思っていたが、すぐに他人事ではなくなってしまった。

「景っち、助けてー」

希望先輩は、ついに俺に泣きついてくる。何だか強烈な殺気を感じるのだが、気のせいだと思いたい。

俺は巻き込まれたくないと思っていたんだが・・・正直いい迷惑だ。

何故、ここまで希望先輩が衣先輩を恐れるのかというと、2人とも1年だった頃にある秘密を希望先輩が新聞でばらしてしまったんだそう。

しかし、翌日にはその新聞は1枚残らず自主回収をする羽目になった。関係者は皆、黙秘を貫き何も真相を言わなかった。その1人が希望先輩である。ちなみに何があったかは聞いたことがないので分からない。

「俺に泣きつかれても、無理ですって・・・。あ・・・」

希望先輩に構っていると、すぐ側に衣先輩がいることに気付いた。すると、衣先輩は俺の方を向くと、初めて微笑を浮かべる。

そして、机を回り込んでこちら側にいる俺の目の前まで来ると、俺の肩を掴む。・・・何されるんだ？俺は反射的に目を閉じてしまった。

「少しじつとしてくださいね」

だが、いつまで経っても何も起きないと思ったときだった。  
前髪をあげられ、おでこに何か柔らかく水っぽいものが押し当てられた。

その瞬間、他の5人から悲鳴のような叫び声があがった。

「「ああー！ーっ！！」」

それが何かということを理解するのに、時間はそれほどいらなかった。

「キキキキ、キスです。景先輩と霧生先輩がキスです」

「衣先輩・・・ずるい」

美玖と恵麻が恨めしそうに言う。他の3人は何も言わないが、同じ様に衣先輩を恨めしそうに見ている。

衣先輩は、さっきと同じ様に不敵な笑みを浮かべながら、5人の所へと戻っていった。

どうやら機嫌が戻ったようで、希望先輩はほっと胸をなでおろしていた。

「次は、私の番だね」

そう言うと、明月院さんが立ち上がった。

何だか、照れたり頭を横に振ったりと・・・頭の中が忙しそうだった。

それを、半目で見ていた希望先輩は、溜息をつくとやる気の無さそうに言った。

「あー・・・今度から、景っちに近づくの禁止ね。はい、ルール追加。異論は認めないよ」

「希望先輩、それはえこひいきじゃないんですか？」

突然加えられたルールに由真が文句を言う。

だが、希望先輩は目を合わせることもなく黙って首を横に振った。それは、勢いよく・・・首が飛ぶんじゃないかと思うくらいだった。その気迫に圧倒された由真は乾いた笑いを出し、ぎこちない笑顔で引き下がった。

「では、私、明月院 陽菜の番ですね。では、始めます」

そして話を始める明月院さん。

だが、俺は話をしたことなどほとんどない。会ったときに挨拶を交わす程度の関係でしかない。

いつも、大抵友人が取り巻きがあるので話しかけづらいのだ。それ以前に話す事がないわけなんだが・・・。

・・・何故、俺のことが好きなのか、全く分からない。

聞いてみたら分かるのかもしれないと俺は明月院さんの話に耳を傾けた。

「有栖君とこうして2人で話すのは久しぶりだね。初めて話したのは、いつだか覚えてるかな？」

「・・・覚えてない、悪いな」

俺が素直に答えると、明月院さんは少しだけ残念そうな顔をする。気を取り直すようにまた話し始める。

・・・何だか悪いことをしたな。

「うん、でも覚えてなくて当然だよ。だって、もう2年も前の話だから。あれは・・・中学3年の頃、修学旅行で京都に行った時のこ



とだよ」

「ここ、どこだろう・・・」

あの時、私は個人行動をしていたら道に迷っていたんだ。

私ね、実はひどい方向音痴なのに、興味あるものを見つけるとついそっちに行っちゃうの。

それで、私は道に迷っていたんだ。

そんな途方にくれていた私を助けてくれたのが、有栖君だったんだよ。

「なあ、確か・・・同じクラスの明月院さんだよな？こんな所で、しかも1人で何してるんだ？」

「え・・・？あ、有栖君。ああ、よかった。・・・ここどこか分かりますか？」

でも、この時、有栖君も道に迷っていたんだよね。

「いや、俺もたまたまうちの制服を着た人を見かけて声をかけたんだが・・・」

「・・・お互い道に迷ったんですね」

この時、有栖君はお土産物屋で道を聞いてくれたよね。

それに、髪飾りをなくしたって私が気付いたとき、一緒に遅くまで探してくれて、一緒に先生に怒られたこともあったよね。

「その時からかな。気がつく和有栖君のことを気にしていたのは。」

そのうち私も丁寧語じゃなくて普通に話せるようになったけど、なかなか話をする機会もなかったんだよ。私も2人きりで話がしたいってずっと思っていたんだよ。・・・それで、もしよかったら・・・」

そして、明月院さんが、一呼吸置いて何かを言おうとした時だった。希望先輩が、時計をチラッと見ると、静かに口を開いた。

「はい、1分経ったよ」

「えっ？もうなんですか・・・あ、あのー・・・もう少し延長は？」

明月院さんがそう言った時、予鈴が鳴った。明月院さんは、それを聞いて悟ったような表情をすると、元の場所へと大人しく戻っていた。だが、戻る途中1度だけ俺の方を向いた顔は何かを言いたげであった。・・・最後に、何を言おうとしたのか？俺を含めて誰も分からず仕舞いだった。

明月院さんが戻ったのを見届けた希望先輩は、少し悩むと席から立ち上がると言った。

「ああ・・・そろそろお開きにしようか。時間無いし」

皆も、そうだねと次々と同意し頷くのだが、まだ何もしていない恵麻と美玖は違った。

「・・・私たちの番はないの？」

「はい、これではみんなと違ってわたしたちが不公平です」

希望先輩に詰め寄ると、胸倉を掴むようなことはしないものの、一歩間違えて下手なことを言ったら殺されそうな気がする。

そのせいか、希望先輩は言葉に詰まって顔は酷く引き攣っており、

先ほどの衣先輩のときとは違った意味で泣きそうな目で俺の方を見る。

「俺、授業に遅れるとまずいのでお先に失礼します」

俺が、そう言うのと2人とも我に返ったようで、あたふたとしながらも弁当を片付け俺の後に続いて来た。

そして、1階に教室がある美玖と梓依と分かれるとき、美玖はこちらに寄ってくると言った。

「あ、あの、放課後一緒に帰りませんか？今日は部活休みなんです。そ、それに・・・まだわたし・・・紹介してませんし・・・」

美玖は、顔を真っ赤にして両手の人差し指を互いに当てながら俺を見上げる。

瞳が潤んで見えるので、可愛いと一瞬思ってしまったが、すぐに周りの空気が凍てついていることに気付いた。

「ふーん・・・景君。私も一緒に帰っていいよね？」

恵麻の冷たい視線が俺に突き刺さる。肌がちくりとするのは果たして気のせいなのだろうか？

すると、反対側から梓依が俺の腕を取ると俺をぐいと引っ張る。

「景先輩、美玖ばかり鼻屣し過ぎだよ。私も一緒に帰るから。約束！」

梓依は強引に俺の小指に自分の小指を絡めて約束をさせた。・・・美玖だけでなく、恵麻や由真も睨んだのは威嚇なのだろうか？俺が考えてる間に梓依は、満足そうに教室へと走って行ってしまっ

た。

後に残された俺たちも、美玖に別れを告げると階段を上って教室へと急いだ。

俺が教室へ戻り、携帯をチェックすると希望先輩からメールが届いていた。

何かと思い、メールを開いてみると・・・。

「・・・景っちのおかげで助かったよー。今度何かおごってあげるね」

・・・本当に調子のいい先輩だな。

だが、そんな先輩を憎めない俺がいることも確かだった。

色々と校内の話を聞かせてもらったりして、世話になっているからな。

「ん？まだ、何かあるな」

よく見ると、まだメールにはスクロールできる部分が残っていた。

俺は、妙に空白の部分が続く中、一番下までたどり着いた。

そして、そこにはこう書いてあった。

5円チョコだけどねー（笑）、と。

・・・訂正しよう。やはりこの先輩は迷惑しか持ってこないトラブル

ルメーカーでしかない。

## phase 5..あるラブコメの話 後編

放課後、由真や幸樹は部活のために、教室で別れ、恵麻とともに下校しようと校門に差し掛かった。

校門では俺たちと同じ様に友人同士で固まって下校する学生の姿が数多く見られた。

そういえば、美玖や梓依と一緒に帰ろうと言っていたが、どこにいるんだ？俺が、そう思って辺りを見回したときだった。

校門の方から、俺を呼ぶ、聞き覚えのある声が聞こえた。

「有栖さん、こちらですわーっ！」

・・・衣先輩だな。近くにいても関わらず無駄に大声を出している。

そのためか、校門に行く学生が皆、先輩かその視線の先にいる俺たちを見ていた。

俺と一緒にいる恵麻の顔を見ると、同じ様に恵麻も呆れているようだった。思わず俺たちは顔を見合わせ、先輩の行動の意図を疑った。

「この声は衣先輩だね・・・。何であんなに大声なんだろう。私たちとても近くにいるのにね・・・」

「しかも、あんなに手を振らなくても分かるんだが・・・」

俺たちは恥ずかしさのあまり、他人のふりをしたかったが、それができれば苦労はしない。

早く止めさせたい、その一心で校門まで走った。

俺は、恵麻を置いて校門まで一気に走ると、衣先輩であることを確認する。

だが、当の本人は、何を考えているのか俺が走ってくるのを見て嬉しそうに大きく手を振った。

俺は、走ってきたせいで息が少し上がっていたが、大きく1度深呼吸をして呼吸を整えると、衣先輩に文句を言った。

「衣先輩、何やっているんですか！？生徒会の仕事があるんじゃないんですか？」

だが、衣先輩は間を置くことなく言った。

「1日くらいさぼっても平気ですわ」

その自信たっぷりの態度は、何を根拠にしているんだ？

いつも思うのだが、衣先輩が自信が無さそうにしている所を俺は見ることがない。

今も、堂々と胸を張っており、どこにも不安を感じさせていない。

衣先輩が正しいと言えば、それが例え間違ったことであつたとしても、正しいことであると錯覚させられそうになるほどに、いつも堂々としている。

・・・だが、今日はそうもいかないようだった。

遠くから衣先輩を呼ぶ声が聞こえ、段々とその声は大きくなるのが分かった。

背が小さいので、よく見えないのだが、声で希望先輩だと分かった。希望先輩は、真っ直ぐにこちらへ走ってくると、息1つ切らすこと

なく、すぐに衣先輩と対峙する。

「ちょっと衣っち！ダメだよ、帰ったりしたら……。会長がいないと会議にならないんだから早く戻ってきてよ」

「……。む、そんなことはないのですわ。第一、会議ならあなたがいれば問題ないのではありませんか？それに私といえども、毎日会議ばかりでは飽きてしまいますわ」

口を尖らせ、子供のように文句を言う衣先輩を希望先輩は冷たく一瞥すると俺の所へやって来た。

すると、唇がひくひくと動き、笑いを耐えているのが分かった。ちよūd衣先輩からは見えない位置まで我慢していたのだろう。だが、その笑いを止めると、俺を見上げながら手招いた。

「ちょっと耳貸して」

いつもとは違う有無を言わせぬ態度に俺は少し中腰になった。

俺が、耳を近づけると希望先輩は、少しだけ声を低くして小さな声で言った。

「景っちにも一芝居打ってほしいんだけど、いいかな？」

「具体的にどうするんですか？」

「景っちは、やるべきことをしない女の子は嫌いだよね？私が、景っちにその話題を振るから、その時そう言ってほしいの。そうでもない、衣っちは帰ってこないから」

「……。はあ、分かりました」

希望先輩は、俺の返事に1つ頷き笑うと、衣先輩に見据え言い放った。



「景っちが、戻ってくれたら日曜日に付き合ってくれるって。ね？」  
「なっ!？」

「分かりましたわ、戻りましょう」

「「ええっ!？」」

嵌められた・・・そう思ったが、もう遅い。

希望先輩は、俺の方を見るとしてやったりといった感じで笑いながら帰っていった。

後に、残されたのは俺と・・・。

「・・・説明してくれるよね？」

「ひ、ひどいです・・・景先輩」

「そういうのではないと思うよ、景先輩」

俺に詰め寄る恵麻、美玖、梓依だった。

・・・どうしろと言うんだ。そもそも俺が悪いのか？考えても答えが出てくるわけではない。

それに、俺が困っていても誰かが助けてくれるわけではない。

そもそも俺の周りには、敵しかない。

周りを見れば、一目瞭然だ。

「景君、私の話聞いてる？」

「・・・」

まだ発表すらさせてもらっていない恵麻と美玖。

そして、発表はしたものの、今回の結果に納得がいかず慥然とした顔の梓依。

・・・どこに味方がいるんだ？

野次馬は増える一方だが、俺の味方になりそうな奴は一向に現れない。

「俺の話を聞いてくれないか？こんな所にいたら邪魔になるから、歩きながら話すぞ」

・・・まずは、どうにかして3人の誤解を解かないとな。

俺が、歩き出すと恵麻たちもついて来た。

「さてと・・・何から話すか・・・」

俺は、15分ほど根気よく恵麻たちの誤解を解くべく話し続けた。

時折、逆ギレしたり、あからさまに面倒な質問を無視したりもしたが、次第に恵麻たちも理解してくれたようだった。

そして、最後に美玖が念を押すように聞いてきた。

「えーと・・・つまり、希望先輩の嘘だという事でいいんですね？」

「まあ、そういうことだ」

・・・ようやく誤解が解けたな。俺は、内心ほっとする。

だが、恵麻の言葉にもう1つ問題が残っていたことを思い出してしまった。

「でも、景君。だったら、衣先輩はどうするの？」

「メールを送っておくか。まあ、希望先輩の身が非常に心配なんだ

が・・・」

そして俺は、日曜日の件はまだ決まっていないことや、校門の話は希望先輩が衣先輩を呼び戻すために俺をエサに使ったに過ぎないということを衣先輩に送っておいた。

最後に、ほどほどにお願いしますと打っておいたが、あまり意味を成さない気がする・・・。

・・・希望先輩、きちんと成仏してください。俺は、心の中で合掌すると、このことは忘れることにした。

俺がメールを打ち終わると、待っていたと言わんばかりに恵麻が俺に寄って来た。

「景君。そろそろいいかな、アピールしても？」

恵麻に続くようにして美玖もまた寄って来る。

そして、どさくさに紛れるようにして、梓依も後ろから言う。

「あ、わたしは次をお願いします」

「じゃあ、私は最後に」

だが、あっさりと2人に気付かれ却下される。

「ダメだよ、梓依ちゃんは」

「梓依は、ダメに決まってるよ」

「・・・あはは・・・残念・・・」

美玖と恵麻の剣幕に梓依は引き気味だが、その2人に囲まれている

俺はもつとドキドキしているぞ。

龍と虎に睨まれているような、そんな気分がする。

好きな人というドキドキとは絶対に違う、何と言うのか・・・これがつり橋効果というやつか？

俺が、ふとそう考えていると、いきなり美玖が俺に声をかけてきた。急にかけられたものだから、ドキッとしたが、きつとこれがつり橋効果なんだろう。

「立ち話というのも疲れますし、よろしければわたしたちの家にどうですか？」

だが、その提案に対して、恵麻が渋い顔をする。

「それ、ずるいと思うんだけど・・・」

梓依は、特に何も言わないが、俺に期待するような眼差しを送ってきているから、きつと賛成なんだろう。

まあ、俺も公園などの衆人環境で、アピールというのは聞くのは恥ずかしい。

現に、近くに見える公園では、小さい子供とその親が何人もいる。

「・・・そうだな。その公園も人が多いしな・・・」

俺が、公園を見てからそう言うのと、恵麻も同じ様に公園を見た。そして恵麻も、そうだねと賛成する。

やはり、衆人環境で言うのは、恥ずかしいと思ったようだ。

恵麻も賛成すると、美玖はちょっと待ってくださいねと言うと、家に電話をかける。

それから、10分ほど待つと、いつもの車がやって来た。

「景先輩、恵麻先輩。どうぞ」

俺と恵麻は美玖に促され、車に乗り込んだ。

乗っている間、俺も恵麻も何だか落ち着かず、そわそわしていたが、美玖と梓依は不思議そうに俺たちを見ていた。

・・・何だか、育ちの違いを感じるな。

美玖たちの家にたどり着くと、すぐに応接間に案内された。すぐに、長良さんが紅茶とお菓子を持ってくる。

すると、梓依がこっそりと長良さんに一言二言伝えると、長良さんは俺たちにお辞儀を1つすると、部屋から出て行った。

長良さんが部屋から出るのを、横目で確認した梓依は、さてと、そう呟くと、紅茶を1杯すすむ。

そして、のんびりと口の周りを拭くと言った。

「じゃあ、始めようよ。あとは、恵麻先輩と美玖だけだね」

それに対して、美玖と恵麻は互いに見合ってから頷いた。

「私が先でいいよね、美玖ちゃん」

「はい、わたしも精一杯頑張ります」

2人は互いに健闘を誓い合うと、まずは恵麻が少し緊張した面持ちで俺の前に立った。

そこで、恵麻は1つ自分の胸に手を当てて、そっと目を閉じて何かを呟くと。もう1度目を開け、話を始めた。

「景君は、どんな女の子が好きかは分からないけど、私はあくまでもありのままの私を伝えるよ。私は他のどんな子よりも景君と一緒にいた時間は長いから、景君も知っているかもしれないけど最後まで聞いてほしいな」

恵麻の瞳には、いつもとは違った真剣味を帯びていた。

それは、まだ俺たちが幼稚園だった頃の負けず嫌いだった頃の瞳だった。

「私はね、料理が得意なんだよ。特に、肉じゃがとかオムライスとか・・・あと、ご飯を炊くのも上手だし、それに、お菓子作りも好きだよ。私は・・・景君と一緒に料理したいと思うんだ。だから、よかったら一緒に練習しよう?・・・私は、景君の少しマザコン気味な所も、年上、色気のある子に興味のないことも含めて好きだよ」

・・・知っていたのか!? あ、ここには美玖も梓依もいるんだった・・・。

俺は、恐る恐る美玖たちの方を向いた。

そして、俺と視線が合うと、美玖と梓依は少し違う反応を見せた。

「あ、あの・・・人の好みは千差万別ですから・・・ううっ・・・色気はダメですか・・・」

「景先輩・・・マザコンなんだ・・・でも、私はまだセーフ」

がっくりと膝をつく美玖と、ほっとした様子の梓依。

そして、言った後に俺の顔を見て失言に気付いたようで、困りきつ

た表情へと変わる。

「景君、どうした・・・の?・・・あっ!」

「・・・恵麻、今頃気付いても遅い」

これは、俺を陥れるために集まりなのか?

恵麻は、俺と美玖、梓依を交互に見ておろしているの、この問題を解決してくれそうにない。

また、美玖は俺のことを黙ってじっと睨んでいるし、梓依はそんな美玖を宥めようとしていて、話しかけられる様子ではない。

勇気を出して1度話しかけてみたが、威嚇され、それっきり話すことが出来ない。

しばらく俺たちは誰も話すことなく時間が過ぎていった。

「・・・・・・・・」

皆、話のきっかけを伺っているようで、誰も互いをちらちらと見るだけで、話そうとはしない。

だが、最も話さないだろうと思われた美玖が急に俺に話しかけてきた。

「景先輩」

俺は、急に話しかけられ何故だか背筋をピンと伸ばして返事をする。

「は、はい」

よく考えれば、改まる必要はどこにもないはずなのだが、どうしてだろうか?

だが、それを見た美玖は、ようやく硬かった表情を崩した。

「・・・くすっ。景先輩、気にしすぎです。では、私の番ですね」  
「よかったね、景先輩。あ、よくもないかな・・・」

梓依が複雑そうな顔を見ると、美玖は口を尖らせる。

「梓依、それはいいに決まってるよ。完璧な人間なんてどこにもいないんだから」

俺に微笑んでくれるのはいいが、素直に喜べないのは何故だ・・・。  
だが、美玖は俺の複雑な思いに気付くことなく話を続ける。

「わたしが、景先輩のことが好きになったのは、こんなわたしに対してもみんなと変わらずに話しかけてくれるから。でも、たまに氣を使ってくれることにも、それもわたしが特別なんだって思えるんです。・・・好きになってしまったら、矛盾した思いも持ちちゃってもいいですよね？」

俺が美玖にしたことなんてないに等しいんだがな・・・。少しずつ歩けるようになったのは、美玖が努力しているからに過ぎない。

・・・俺に変な幻想を抱いているのだろうか？

俺が目を伏せて考えている間も、さらに美玖は、話を続ける。

「わたしは、一緒に映画を観たり、ガーデニングをしたり・・・とにかく一緒にいたいんです。それに、今は景先輩の好みでなかったとしても、努力して好きになってもらえばいいわけですし・・・。梓依、わたしはまだ負けたわけじゃないから」

美玖は最後に梓依を挑発するように言う。何だかんだ言っても、妹



には負けたくないようだ。

だが、梓依は挑発に乗ることなく俺を見て意地悪く笑うと言った。

「でも、最悪2人とも貰ってもらうのもありかもよ？」

「あつ、それはいいかも。景先輩はどう思いますか？」

期待の眼差しを向けられ俺は思わずたじろぐ。

俺が、答えに窮していると、いらいらしたように恵麻が言った。

「景君・・・それは犯罪だよ？」

「でも、犯罪でもばれなきゃオツケーでしょ」

梓依は、俺にどうしてほしいんだ？聞きたいのは山々なのだが、恵麻が睨んでいるのでそれはできない。

それに、何だか泣きそうだ。

俺は呆れて何も言いたくなかったが、恵麻に泣かれてもいい気分はしないので、宥めようと声をかける。

「恵麻、俺だってさすがに2人同時に付き合うような真似はしないぞ。第一、そんなことをして恨みでも買ったらどうする。ドロドロの関係は、ドラマとアニメで十分だ。俺は俺が大切に思った人とうっと一緒にいたい。もし、相手もそう思ってくれるなら・・・それが一番幸せなんだろうな」

・・・何、恥ずかしいこと言ってるんだろうな。

それに皆、黙っているから余計に恥ずかしさを覚える。

俺は、この空気に耐えられずに頭を掻くと叫んだ。

「誰か、反応してくれないと恥ずかしいだろ！」

「あ・・・ご、ごめんなさい」

美玖が、申し訳なそうに言うものだから、余計に惨めに感じる。穴を掘って埋まりたい気分だ。

俺が、恥ずかしさで真っ赤になっていると、恵麻が真剣に言った。

「でも、そんな景君も私は好きだよ」

だが、既にやけくそになった俺は、恵麻のフォローも聞き流し、適当に返事をしておいた。

「ありがとう、恵麻。お世辞でも嬉しい・・・」

「そんなことない！」

恵麻は、俺の言葉を途中で怒ったように遮ると、俺の両肩を掴み、目を閉じて背伸びをする。

近づいてくる顔に、俺は間拔けな声を出すのが、精一杯だった。

「え？」

それは一瞬のことだった。恵麻は、すぐに俺から離れると俺をじっと見つめていた。

俺は、ほっぺたに残る感触に手を当てると、恵麻は顔を真っ赤にして手で顔を覆う。

・・・嘘だよな？

俺は、美玖と梓依の様子を伺った。

「あ・・・ああっ・・・」

美玖も梓依も目を丸くして、少しばかり顔を赤らめて俺と恵麻を見ていた。

だが、段々と肩を震わせると、梓依が恵麻に向かって叫んだ。

「あ、ああ・・・え、恵麻先輩・・・ず、ずるいです！私だってしたいのに・・・」

すると、恵麻は手を顔からどけると、挑発するように言った。

「これが、幼馴染の特権だよ」

恵麻の誇らしげな態度に、何かが切れる音がしたような気がした。梓依は、悔しそうに恵麻を睨むと、宣言した。

「だったら、私も景先輩にキスする！」

そう言って、梓依は走った。

当然、恵麻はそれをさせまいと立ち塞がる。

梓依は、恵麻を避けようと、向きを変えようとした時だった。

「あっ!？」

何もないはずの床でつまずくと、そのままの勢いで恵麻に突っ込んでいき、押し倒すような形で倒れてしまった。

俺と美玖は、心配して慌てて駆け寄った。

「おい、大丈夫か？」

だが、俺たちは見てしまった。

2人の唇が重なってしまっているのを。

「う……うー……ん？」

「……うあ……」

「「ああああーっ！？」」

慌てて2人とも離れるが、もう遅い。

2人とも唇を手で覆っていたが、すぐに意味がないと悟ったようで、互いに罵り始めた。

「恵麻先輩、どうしてくれるんですか？私の……私のファーストキスが選りにもよって恵麻先輩だなんて……」

「それは私のセリフだよ、梓依ちゃん。ファーストキスは景君とつて決めてたのに……」

そもそも女同士は、ファーストキスに入るのか？

確か、親は入らないと聞いたことはあるんだが……。

互いに言い争う2人を見て、ファーストキスについて考えていると、美玖が俺の服を引っ張った。

「あ、あの……」

美玖は車椅子から立ち上がり、俺の方へとふらふらと歩いてきた。

「どうした……って、危ない！」

俺が慌てて美玖を支えると、そのまま美玖は俺の胸に頭を預けた。

俺が注意をしようとすると、美玖は俺を見上げる。

そして、恵麻と同じ様に背伸びをすると、俺の頬に軽く口づけをし

た。俺はまたも、顔を真っ赤にした。

「えへへ・・・唇には、いつか景先輩からお願いします」

幸せそうに言う美玖だったが、周りはそうではなかった。

「み、美玖・・・。美玖の裏切り者！最低だよ・・・」

「け、景君は無防備すぎです。それに、美玖ちゃん・・・計算高いんだね・・・」

梓依は今にも泣き出しそうだし、恵麻はむっとした表情をしている。そして、未だに俺が抱きとめた状態の美玖は猫みたいに俺に擦り寄っていた。

・・・もちろん、それが恵麻と梓依の感情を逆撫でしたのは言うまでも無い。

「景先輩、ありがとう」

結局、あの後も色々あったのだが、最終的には梓依も俺の頬にキスをするということで、決着がついた。

俺は家に帰ると、帰り際に恵麻に言われた言葉を思い出していた。

「あのね、景君。これは、押し付けじゃないから、もし景君が私たち以外の女の子が好きだって言うなら、別に選ばなくてもいいんだよ。でもね、今日のことで分かっているとは思うけど、私たちは理由

は違ってみんな景君のことが好きなんだよ。もし、景君の心が決まったなら、教えてほしいの。みんな知りたいんだよ、景君の本当の気持ちが。・・・いつまでもはつきりもしないのが、一番私たちを苦しめるって事は忘れないでね」

・・・俺の気持ちか。

一体どうしろと言うんだ。

俺は、ベッドに寝転んで天井を見上げた。

天井に答えが書いてあるわけじゃない。だが、俺はじっと見つめていた。

「・・・眠れないな」

俺はベッドから起き上がると、カーテンをそっと開く。

恵麻の部屋の明かりは、まだついており、ぼんやりと空を見上げる恵麻の姿が見えた。

しかし、すぐに恵麻はカーテンを閉めると、部屋の電気を消してしまった。

俺に気付いた様子はなかったので、寝る前に少し空を見ていただけのようだった。

・・・俺も寝るか。

俺は、再びベッドに寝転ぶと、天井を見上げる。

皆が、俺のことを好きだということは今でも信じる事が出来ない

部分がある。

だが、事実は事実として受け止めなくていけない。

俺が、今一番好きな人・・・か。

そうだな、俺自身のためにも、そして皆のためにも決めなくてはいいけないことだよな。

俺は、明日言うことを決めると、眠りについた。

俺の好きな人は・・・。

## Phase 5..あるラブコメの話 後編（後書き）

おまけ 幸樹編

「なあ、景」

「何か用か？幸樹」

「ああ。・・・や（以下、自粛）」

エリス編

「景様、今度私と一緒に・・・」

「どうした？エリス」

「・・・い、いえ、何でもないです」

とりあえず、これで20000アクセス記念は、終了です。  
ちよっと、双子と恵麻を優遇しすぎた感はありませんが・・・。  
読んでくださった方、ありがとうございました。



## **p h a s e 6 : : これ、何てエロゲ？ (前書き)**

タイトルに深い意味はありません

## Phase 6..これ、何てエロゲ？

いつもと変わらない昼休み。

珍しく今日は食堂に来ていた大助が俺たち3人に言った。

「なあ、今日俺んち来ないか？」

俺は元々部活動はやっておらず、幸樹の野球部は休み、晃も同好会も休みだった。

ちなみに、この学校は全員部活動か委員会活動が義務付けられているが、俺は晃の同好会に名前だけ貸している。

それは、既に去年の段階で衣先輩にバレてしまったのだが、生徒会の仕事を手伝う代わりに見逃してもらっていると思っていた。

だが実際には書記の後継に内定している。ちなみに書記だけは選挙がない。

その理由は、以前書記は選挙制だったらしいのだが人気優先で当選してしまうことが多く、結果として仕事をしない人が多かったらしい。

そこで、現在では前任者、生徒会の任命制になってしまったらしい。どうでもいいだろうが、前者の意思が優先だそうだ。

「俺は、暇だからいいぜ」

「僕も別にいいよ」

幸樹と晃は何の疑いもなく賛成する。

だが、俺だけが返事をしなかったことに不思議に思ったようだった。いつもは俺も何も気にせず賛成するからだ。

大助は大げさに残念そうに顔をすると言った。

「なあ、景は今日は暇じゃないのか？」

「いや、そうじゃない。ところで何をするんだ？」

俺が、そう質問すると、大助は待っていましたといわんばかりに話し始めた。

「ああ、実はエロゲ買ったんだけど、一緒に攻略しないかって誘いだ」

「今、初めて聞いたんだが・・・」

呆れて俺はこれ以上何も言えなかった。

幸樹や晃もさすがに一步引いた目で、大助を見ていた。すると、大助は慌てたように弁解を始めた。

「分かっていないようだから、説明しよう。ちょっとだけ見てほしいものがあるんだ。それに、たまには、男同士で集まってやるのもいいと思うぞ？」

「・・・」

だが、俺たちの反応はいまいちだった。

互いに顔を見合すが、誰も行く気がないのがよく分かった。

大助も状況があまりよくないことを悟ったようで、腕組みをしてしばらく目を閉じていたが、妙案が浮かんだようで、テーブルに手をつくと話し出した。

「ならば・・・」

「分かったよ、そこまで必死になるなら遊びにいくからさ。少し静かにしてくれる？」

「・・・」

晃にはっきりと言われ、口を開けたまま呆然とし何も言わない大助。ここは、食堂でさっきから延々と大声で話している大助に嫌気が差したのだろう。

俺と幸樹は、顔を見合わせると互いに訝しげな顔をしていることに気づいた。

「なあ、景。これは・・・強制的に遊びに行くって事だよな？」  
「そうなるだろうな」

そして、俺たちはため息を1つついた。  
こうして俺たちは、晃に巻き込まれる形で大助の家へと遊びに行くことになった。

学校が終わり、俺たちは大助の家の前へとやって来た。  
そこで、玄関で出迎えた姉を見てびっくりした。・・・エロゲする  
と言っておきながら、家族がいるのか？

「あら、いらっしやい」

「・・・」

「・・・」

「何ぼーっとしてるんだ？・・・ああ、姉ちゃんに惚れんなよ。見た目はいいが、中身は最低だから」

よく本人の前でそこまで言えるよな。・・・何か肩が震えてるんだが、気のせいかな？

それは置いておくとして少なくとも俺は姉に惚れたわけではない。

一目惚れなんてありえないというのが、俺の持論だ。

やはり人を好きになるなら、見た目以外も必要だと俺は思う。

まあ、見た目は大助の姉はいいと思う。だが、何か裏がありそうなそんな気がした。

すると、大助の姉は大助を腕をつかむと、俺たち3人に向かって笑顔を崩さずに言った。

「先に部屋でちょっと待っててくれる？ 私はちよつとこの子と話があるから」

「景、幸樹。部屋は2階だよ。じゃあ、大助。先に行ってるよ」

何故か、晃は俺たちの背中を押すと、早く2階に上げたがっているようだ。

そもそもここにも邪魔になるだけだろうから俺たちは2階へ上がった。

そして、部屋に入ろうとした時だった。

「ぎゃああああああっ！」

大助の悲鳴が下から聞こえてきた。

俺と幸樹は思わず晃を見た。

すると、晃は平然とした様子で、悟ったように言った。

「気にしたら負けだよ」

「「・・・」」

俺たちは、これ以上断続的に聞こえる悲鳴について話すことはなかった。

ただ、晃が少し怯えたような顔をしていることだけが気になった。きっと、大助の姉に何かトラウマがあるのだろう。まあ、聞かないでおくのが、友人だよな。

10分後、妙にやつれた顔をした大助が、足取り重くやって来た。その後ろには、飲み物と何故かケーキの乗ったお盆を持った大助の姉がいた。

大助とは対照的に非常ににこやかだった。

「ごめんね、ちょっと話が長引いちゃって」

そう言って大助の姉は、にこりと微笑むが、俺はその笑顔に薄ら寒いものを感じた。

それは幸樹も晃も同じだったようで、少し表情が引き攣っていた。

「それじゃ、ゆっくりして行って」

大助の姉が部屋から出て行くと、俺たちはほっとしたように姿勢を崩した。

皆それぞれ思うことはあるのだろうが、俺は何だか大助の姉がいると緊張するのだ。

だが、ほっとしたのも束の間だった。ノックも無しに急に扉が開くと、また姉が入ってきたのだ。

「あ、そうだ、大助。ちょっと私出かけてくるから」

「分かった。それよりノックくらいしてくれよ」

「ああ、はいはい」

大助の言葉をあからさまに聞き流すと、今度は正真正銘彼女は部屋を後にした。

すると、大助は部屋の扉に耳を当てていたが、やがてほっとしたように溜息を1つついた。

「もう行った。・・・しかし、面白い家族だと思わんかね？」

「・・・随分と自虐的だな」

俺がそう突っ込むと、急に現実に戻ったように大助はうなだれた。また部屋には沈黙が訪れる。それを見かねた幸樹が、皆に言った。

「で、エロゲは？さっさとやろうぜ」

・・・この雰囲気でエロゲとかよく言えるよな。

まあ、この空気にしたのは紛れもない俺だから、文句を言えないんだが。

「だよな、そうだった。はっはっはっ、まだ俺もやってないけど、これは当たりのはずなんだ」

大助の奴は本当に立ち直りが早いよな。

突然意気揚々と、これから始めるエロゲについて語り始めた大助を見て、そう思わずにはいられなかった。

「めくるめくエロゲの世界へ、いざ参らん！」

大助はそう言って、あるアイコンをクリックした。

・・・何で、そんなに気合を入れるのか、俺にはよく分からない。

そして、最初から始めるとクリックすると、いよいよゲームが始まった。

と、思ったら急に選択肢が現れる。

・・・ゲームを始めますか？イエス、ノー、と。

俺たちは、いきなり出てきた選択肢に戸惑った。

「・・・ねえ、大助。これさ、大丈夫？」

「さ、さあ・・・」

画面を見つめること数秒。俺は、大助からマウスを引っ手繰ると、迷わずノーを選択した。

すると、大助はにやにやとしながら言った。

「景、お前、CGコレクターだな。景は、CGコレクターの称号を手に入れた」

「そんな称号、断固拒否する」

俺と大助がくだらないやり取りをしていると、幸樹が急に叫んだ。

「おい、ゲーム始まってるぞ」

その声には俺たちは画面を見た。

すると、画面には赤いポニーテールの女が映っていた。



だが、目が死んでおり、何だか修羅場の予感がした。

その俺の予感は的中することになる。

赤毛の女は、口を歪めせると一言だけ喋った。

『ひどいよ、勝』

その言葉と同時に画面が真っ赤に染まった。

そして、BADENDと画面に表示されると、俺たちはしばらくアホみたいに固まった。

どうやら主人公は勝という名前のようだが、そんなことはどうでもいい。

いきなりBADENDって何だ？理不尽にもほどがあるだろ。

すると、大助は机をに手を叩きつけると発狂したように叫んだ。

「ななななな、何じゃこりゃあー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「大助、お前うるせえよ」

幸樹が大助を諫めようとするが、怒りが収まらない大助はなおも叫び続ける。

「こ・れ・の、どこが萌え学園ラブコメなんじゃ、こらあっ！」

だが、画面の中の女に向かって文句を言う大助を見ると気持ち冷めていくのが分かった。

所詮これはゲームに過ぎないのだから。

「大助、そこまで頭にくることか？さっさと続きを始めないと時間

がないんだが」

「はっ・・・そうだった。待ってろ、Hシーン！それに、お風呂とか、ポロリもあるかもしれん」

・・・無いだろ。

大助の凄まじいまでのHシーン等への執念に俺は圧倒された。と言うよりも、呆れて声も出ない。

そこまでして見たいのか？まあ、人のことはとやかく言うまい。俺は少しでも距離を置くことにした。

再び、続きを始めた俺たちだったが、段々とうんざりとしてきていた。

「・・・」

「・・・」

その理由は、BADENDの多さだった。

選択肢が4つというのがさらにあり、最高で6つ。しかも、時間発生の選択肢や選択肢の変化まで用意されているという厄介ぶりだ。やがて、幸樹は渋い表情を俺に向かって見せた。

「・・・おい、これは推理ゲームじゃないのか？」

「いや、一応ギャルゲーだろうな」

俺は、幸樹の意見を否定する。

先程から、何度かヒロインの攻略ルートには入っていると大助が話している。

確かに、あるヒロインがメインになっている節を窺わせる話は何度

かあった。

だが、何故か他のヒロインに邪魔をされたり、その本人に嫌われたりと碌な事にならない。

すると、パソコンの前に座っている晃が俺たちの方に振り向くと、疲れたように言う。

「・・・あのさ、2人で話しないで手伝ってよ。また、選択肢なんだけど・・・」

俺たちは、パソコンの画面を覗き込む。

傍から見れば男が4人でエロゲの選択肢について、ああでもないこうでもない議論している光景は滑稽なのだろうな。

もう当初の目的であるはずのHシーンのことなど、既に全員が忘却の彼方のようなのだ。

「これ選んだら死ぬだろ」

「うーん、ここはやっぱり3番目の選択肢だと思うよ」

「これだから素人は困る。やはり、これしかない」

「・・・大助・・・お前、その言葉を言って何度失敗してるんだ？」

「ここは、一番下だ」

上から、幸樹、晃、大助、俺の順だ。

もう、選択肢を選ぶことを楽しんでる節さえ感じられる。

適当にセーブとロードを繰り返すのももう慣れてしまい、何も感じなくなった。

ただ、1つの疑問を除いては・・・。

そして、それに気づいた晃が皆に言った。

「ねえ、みんなは疑問に思わない？いくらなんでも、本来の目的のシーンが出てこなさすぎると思うんだけど」

確かに、既にたぶん攻略対象であろうヒロインは6人もいる。

その割には、B A D E N Dばかり発生するのはいったい何故なのだろうか。

すると、何か潰れるような音声がパソコンから聞こえた。俺たちは、その音を聞き、パソコンを覗き込んだ。

「・・・また、赤毛のこいつか」

「・・・そうだよな」

俺と幸樹が口々に感想を述べる。

画面では、トラックが走ってきているところへ突き飛ばされる主人公と突き飛ばした赤毛の女が映っていた。

もう、呆れるしかない。そもそも、主人公の死亡原因の半分がこの女なのだからたまったものではない。

お互いに苦笑いを浮かべていると、大助が俺たちの肩を叩いた。俺たちが振り向くと、大助は1つ咳払いをしてから、もったいぶったように話し出した。

「景、幸樹。よく聞くんがいい。・・・このヒロインは重度のヤンデレに違いない」

だが、幸樹はその意見を一蹴した。

「ねえよ。ただの病気だろ」

俺もそう思う。そもそも何だ、不思議な生物みたいな名前は・・・すると、知らないのか言わんばかりの顔をして、大助が説明を始め

た。

「ある異性を強く愛しているが、様々な要因から病んでいるような異常な行動を取るような人のことらしい。(ウィキペディア参照) 　な。まあ、ツンデレの進化系じゃないか。優しく見守ってやればいいじゃないか」

「無理だろ！」

これは俺も、幸樹の意見に賛同するな。

優しく見守っていてもこっちの身が危ないのではやっていられない。俺は、異常行動を受け入れられるほど器量の大きな男ではないのだから。

そのヤンデレのことを考えていると、俺はふと先程の大助の言葉 pensando 思い出し、大助に笑いながら突っ込む。

「その前に(ウィキペディア参照) って何だ？ そんな言葉を入れるな、必要ないだろ」

「いやあ、一応参照してるからしょうがないじゃん？」

くねくねするな、気持ち悪い。

本人は可愛いと思ってやっているのかもしれないが周りはドン引きだってことに気づいてくれ。

俺が露骨に不機嫌そうな顔を見せると、さすがに大助もその行動を止める。

そして、真顔で言った。

「無断転載は普通は禁止なのだよ、景」

「分かった、分かった。それよりもいい加減終わらないか？」

すると、幸樹や晃は頷いた。確かに、パソコンをずっと見ていれば目も疲れるだろう。

だが、いつの間にかパソコンの前に座っていた幸樹が急に叫んだ。

「げっ、また選択肢だぜ。それに何かいい雰囲気だぞ、見ろ！」

興奮気味の幸樹に呆れつつも画面を覗き込むと、少しばかり雰囲気  
がよさそうな感じだった。

どうやら後輩に告白されたらしい。

選択肢は良心的にも3つしかない。

「・・・断る選択肢がないな」

そう、何故か断る選択肢が1つもないのだ。俺は嫌な予感がした。

そんな俺の不安を余所に幸樹は、素直にはいと答えた。

そして、画面の中でストーリーが進んでいく。

『嬉しいです。男の子の私を受け入れてくれるなんて・・・』

俺は、絶句した。

それに、それは皆同じ気持ちだったようで、一様に呆気にと取られている。

そして、幸樹が一言。

「こんな可愛い女の子が男子だどっ!？」

結局、このゲームは積んだままになったと、大助から後に聞いた。

まあ、仕方ないことだな。所謂、地雷を踏んだのだと思っておこう。

この日以来、俺は新作ゲームに手を出すのは止めると決意した。

そもそもゲームをほとんど買わない俺には簡単な決意だったのだが・  
・・。

## Phase 6:これ、何てエロゲ？（後書き）

約1ヶ月ぶりの更新になりました。読んでくださった方、ありがとうございます。

今話も書いていってぐだぐだになっているなど・・・。最早仕様になりつつあります。

こちらは、あと4話で終了になります。そこまでお付き合いしていただければ幸いです。



## おまけという名の作者の自己満足

「勇者よ、この世界を救ってくれ」

気が付くと、俺は何故か知らないおっさんに勇者呼ばわりされた挙句の果てに、魔王というものを倒しに行くことになった。

百歩譲って、そこまではいいとしよう。

だが、1つだけ許せないことがある。

「おっさん、何だこの武器は。銅のナイフと布の服って・・・あんなふざけてるのか？」

俺が怒りをかみ殺して（それでも隠し切れていないが）言うところ、おっさんの隣にいた白髪の老人が淡々と言った。

「我が国は、深刻な財政危機にあえいでおります。国王のHな本への出費や奥様が○流ドラマにはまってしまったりしたものですから」  
「・・・あんたも苦労してるんだな」

だが、老人は俺の言葉を聞いてはいなかった。

「こんな国出て行ってやる」

「・・・」

とりあえずもう1度話しかけてみる。

「こんな国出て行ってやる」

「・・・」

同じ言葉しか話さないとは……。さすがに3度目をやろうとは思わなかった。

ついでおっさんもちらりと様子を伺ってみた。

・・・おっさんは、興味がないうで暢気に菓子を食いながらHな本を読み耽っている。

この調子だとおっさんも同じ様なループになりそうだ。

俺は諦めて、王の間を後にした。

この国は魔王に滅ぼされる前に自ら滅ぶだろ……。  
そう思わずにはいられなかった。

「1人じゃ旅はつらいだろうから、酒場に行ってみるといい。あそこには役に立つ仲間がいるはずだ」

俺は、城の兵士に聞いた酒場に行ってみることにした。  
何でもそこには仲間がいるらしい。

酒場に入ると、威勢のいい声が聞こえる。

「いつらっしやーい」

辺りを見回すと、随分と屈強そうな男やほとんど裸に近いような格好をした女。さらには、銅見ても人でないものまでいた。

俺はカウンターに行くと、そこにいた人のよさそうなおっさんに声

をかけた。

「実は旅に出るために仲間を探していて、ここに来ればいると聞いてきたんだが」

すると、おっさんは奥を指差すと、俺の肩に手を置くと言った。

「ああ、あんたが勇者ってわけか。しかし、毎年装備が悪くなっていくな。・・・同情するぜ」

・・・おい、俺の次の代になったらどうなるんだ？おっさんの言葉に俺は心底不安を覚えた。

まあ、いい。仲間がいればどうにでもなる。

俺は、おっさんに礼を言おうと、期待しつつ奥へと向かった。

奥へと行くと、そこには何人もの人が集まっていた。

男、女、ロボット、人外……。まあ、より取り見取りだ。

俺は後ろから、しばらく様子を観察しているとその中の1人が、俺に気付き声をかけてきた。

「おっ、景。お前が勇者か」

妙に聞き覚えのある声だと思ったら、何と幸樹だった。

それに、奥にるのは皆顔馴染みばかり。どうやら、本格的に俺の夢らしい。

そうなら、適当に楽しむべきか。

俺は、とりあえず真剣に仲間を選んでみることにした。

まずは、簡単に皆の職業を説明しよう。まあ、職業は・・・色々あった。

遊び人という職業もあるが、遊び人は職業としては認めない。

幸樹は、戦士。

「まあ、俺だとかんなものか。初期武器が金属バットというのが納得しがたいんだよね・・・」

晃は魔法使い。

「でもさ、魔法使って何で黒なの？」

恵麻は僧侶。

「どうせならシスターがよかったよ。僧侶って・・・」

由真は格闘家。

「あたし、見た目で決められてるでしょ？」

エリスは、ロボット。

「・・・そのままなんですネ」

陽菜は、詩人。

「ちょっと違うけど、歌ってることには変わらないから大丈夫」

衣先輩は剣士。

「私、真剣は使えませんか？」

美玖は、ネクロマンサー。

「わたしだけ、異色過ぎます・・・」

梓依は、猛獣使い。

「わっ・・・こっち来ないで。私、動物嫌いなんだってば」

他にもまだまだいるのだが、もう説明はいいだろう。

数人、明らかにその職業に向いていないのがいるようだが・・・。

とりあえず役に立ちそうな奴を選ぶか。パーティは4人までらしい。とてつもなく面倒なことだ。

俺は、少しの間考えたと脳裏にふと現在の状況が浮かんだ。・・・結論が決まったな。

「俺は今とてつもなく貧乏なんだ。はっきり言おう。宿代すら危うい。武器防具さえも買えない。だから仲間は要らないんだ」

「・・・」

皆が呆れた目で俺の方を見ている。

理由は分からなくもない。だが、あえて考えまい。

俺は、皆の痛いまでの視線を無視すると、1人で酒場を後にした。

続く

「続くわけではないだろ！」

「わっ、け、景様……。おはようございます」

何故エリスの声が聞こえるんだ？

俺は寝ぼけた頭で周りを見回してみる。

「……。ここは……。俺の部屋か？」

見慣れた机、読まない本が詰まった本棚。そして壁にはカレンダー。どう見ても俺の部屋だった。

……。ということは……。あれか？俺は、寝ぼけて叫んだ所をエリスに見られたというわけか。

だが、当のエリスは俺が恥ずかしいと思っていることなど気付いてもないのだろう。いつものように温和な微笑を浮かべている。

「景様、寝ぼけていらっしゃるのですね。お顔を洗ってきてはいかがですか？お食事の用意ができていますので、早めに降りてきてくださいね」

それだけ言うとエリスは俺の部屋から出て行った。

……。2度とあんな夢を見てたまるものか。

こう決意することは逆効果になりやすいことが多いのは知っているかもしれない。要は1日中意識し続けているわけなのだから……。

「勇者よ、この世界を救ってくれ」

「またか!?!」

「け、景様・・・今日もですか!?!」

俺が2日続けて同じ夢を見たことは容易に想像できることだろうな。

**おまけという名の作者の自己満足（後書き）**

読んでくださった方へ。

ごめんなさい。



## Phase 7..アナザーエピローグ

「景様、起きてください。日曜日とはいえ、もう10時です。いい加減に朝ごはんを食べてください。奥様も待っているらしいです」  
「のわっ」

朝から、俺はエリスにベッドから蹴落とされた。

昔のエリスはこうではなくもつと御しとやかだった気がするのだが・・・。

俺は、まだ少し寝ぼけたままエリスに言った。

「おはよう、エリス」

「おはようございます、景様」

相変わらず、エリスの姿はあの時のままだった。エリスを見ると、よく俺が高校生だった頃を思い出す。

エリスが初めて家に来たのは、高2の春のことだった。

それから、幾年も重ね、俺も今では社会に出て働くようになった。

そして、今では妻と5歳になる双子の娘と息子がいる。

俺がエリスを見て、ぼーっとしていたからだろう。

エリスは不思議そうに俺のことを見つめ返す。

「景様、どうかされました？何だか楽しそうですが」

「いや・・・まあ、そうかもしれない。ちょっとした夢を見たんだ・・・」

そこで、俺は、エリスに夢で見たことを話し始めた。

エリスに話し終わる頃には、起きてから15分ほどが経っていた。慌ててリビングへと飛んでいくと、妻と子供たちの突き刺さるような視線を浴びることになった。

エリスはただ俺の隣で幸せそうに笑っているだけだった。

俺は、すぐに子供たちの視線の意味に気がついた。・・・今日は、外に遊びに行く約束をしていたんだった。

結局、俺は昼と併せたような朝食を、妻と子供たちは昼食を食べてから外を出かけることにした。外に出ると、エリスが俺に話しかけてきた。

「今朝の景様の夢のお話は大変面白かったです。また、お話を聞かせてくださいね」

そう言うと、エリスは俺の返事を待つことなく俺から少しだけ離れる。

すると、入れ替わるように2人の子供たちが俺の手を握ってきた。

「お父さん、手を繋いでもいい？」

「ずるいよ、お姉ちゃん。今日は、僕がこっち」

俺の右手を巡って争う2人を見て思わず、俺は自然と笑みがこぼれていた。

妻はエリスと談笑していたが、俺の視線に気づくと何か悪戯を思いついたような笑みを浮かべる。

そして、おもむろに俺たちの側へ来ると、俺の腕に抱きつく2人の子供たちに言った。

「いい、奈津美、達也。お父さんはお母さんのものなの」

子供の前で、くつつくなと言いたいが、言おうと拗ねるので言わないでおく。

だが、最近は子供たちも黙ってはいなくなった。いつもは喧嘩の多い2人だが、こういう時だけ、妙に意見が合う。

「お母さん、いつもお父さんとべったりなんだから別にいいでしょ？」

「そうだよー。お父さんは僕のお父さんだもん」

「ううん、お母さんのものよ」

・・・いい年して、子供と張り合うなよ。俺は、腕にしがみつく妻を見た。

口に出すと後が怖いのである意図を込めて視線だけを向けたが、妻にはそれだけで俺の意図が分かったようだった。

今も昔も、表情から心を読まれてしまう俺の悪い癖は未だに直っていないようだ。

「・・・なーに？文句あるの？」

「ないない。全く無い」

今でこそ、俺は完全に尻に敷かれているが、昔は妻も非常に可愛らしく守ってあげたくなるようなタイプだった。

それが、今ではすっかり強く逞しい女性になってしまった。

別に悪いことでない、むしろいいことなのだが、たまに俺の意見を聞かずに突っ走るのには止めてほしい。

そして、勘は年を重ねるごとに鋭さを増している。

「・・・今、私の悪口を考えていたよね。でも、こうしていると付き合っていた頃を思い出すなー」

「そうか？昔からこうだったから今でも気分は変わらないんだが」

俺がさらっと流すと、妻は少し嬉しそうだった。俺の何気ない言葉で一喜一憂するのは可愛らしくもありまた迷惑でもあるのだがな。こうしてここを妻や子供と歩くのは1ヶ月ぶりくらいかもしれない。ここしばらくは忙しくてほとんど構ってあげなかったから、たまにはこういう風に散歩するのも悪くないと俺は思う。

少しの間、妻と一緒に歩いていると前をエリスと一緒に歩いていた娘がいきなり人を指差し叫び声をあげた。

「ねえ、お父さん、お母さん。見て見て、あの人すごいよー」

「こらっ、奈津美。人を指差していけません」

奈津美を怒る彼女の姿を見ると、子供が生まれる前にはちゃんと育てられるか心配だと言って妻の姿が嘘のように思える。

俺は、娘が何に興味を持ったのだろうと思ひ、指差す方を見てみた。構ってくれる人がいなくなった息子がいつの間にか俺の側に来ており、俺は達也をこちらへと呼んだ。

達也は嬉しそうに俺の下へと駆け寄ってくると、奈津美と同じものを指差して聞いた。

「・・・お父さん、あれ何だろう？」

達也の指差したのは、他でもない量産型のメイドロボットだった。エリスとは違い、多少ロボットの雰囲気が残った外観をしている上に、エリスほど物事を考えたりすることはないらしい。

俺の子供たちはエリスを見慣れているために、量産型に触れる機会はなかったのだが、むしろエリスのようなタイプは今では非常に高

額であり、むしろ俺みたいな一般家庭には縁のないものである。そして、現在ロボットは介護の分野にも進出し始めており、更なる飛躍が期待されているのだという。

俺たちがしばらくそのロボットを眺めているとエリスがふいに声をかけてきた。

「景様。あれは去年、流行したP8HK12型ですね。あのタイプは家事全般に優れた能力を発揮するんですよ」

「ということは、あれもエリスの後継機ってことか？」

「そうですね・・・元をたどれば私にたどり着きます」

そうなんだよな、エリスが俺の家に来たのもテストを兼ねての事だったわけだし。

今でも、動くのは技術の賜物であり、時折メンテナンスをしてくれる人たちのおかげでもあるんだがな。

あの頃エリスを通じて知り合った人とは今でも交友を持っている。

たまに手紙が来たり、家族で食事をすることもある。

俺が過去のことを振り返っていると達也は、エリスのことを感心したように見上げていた。

「エリスってすごいんだー」

「はい、実はすごいんですよ」

エリスが達也の頭を撫でると達也も嬉しそうにエリスに笑顔を向ける。

以前は、こんなことを言うことはなかったが、これも長年世間で暮らしているエリスの経験のなせることなのだろう。

だが、子供の片方だけを贖済するようなことをしていると、大体い

つも同じようなことが起こるんだよな。

俺は、そつと妻の方を見ると少し怒った顔をした奈津美がエリスの服の裾を引っ張っていた。

「あーっ、達也ずるいー。私も私も」

「そんなに慌てなくても大丈夫ですよ、奈津美様」

エリスが頭を撫でると、奈津美も満足そうに笑顔を見せる。

双子だからというわけではないのだろうが、子供たちは同じ待遇を要求することが多い。

もちろん、俺も妻もエリスも子供たちには平等に接しているつもりだが、あくまでそれは大人からの視線に過ぎない。

子供から見れば、それが平等ではないこともあるのだと俺は知った。

そして、構ってあげないと拗ねるのは何も子供だけでないことも俺は知った。

「子供たちが構ってくれなくてさみしいよー」

「あー、はいはい。そんなことで泣くな」

妻もこうなるのだ・・・。

まあ、これはこれで可愛いからいいとするか。だが、俺の目は明後日の方を向いていた。

「本当にそう思っていないくせに・・・」

・・・まあ、ばれるよな。俺は、昔から隠し事が苦手だからな。すると、エリスが妻に同調して、俺に文句を言ってきた。

「そうですよ、景様」

「エリスはやっぱり分かってるよね。それに比べて、景君にがつかりだよ」

エリスと妻は似ている所があるようで、こんな時だけ気が合う。いつもはむしろ仲が悪いはずなのだが・・・。

エリスが面と向かって嫌いだと言ったのは良くも悪くも妻だけだ。

「・・・がつかりされても困るんだけどな」

妻とエリスの2人がかりで非難されたものだから俺としても反論したかったが、どうせ何を言っても勝ち目など無い。

口喧嘩をして、いつも最後に謝るのは俺なのだから。昔は、何度も喧嘩したが、最近はスルーできるようになった。

その代わり、さらに言いたい放題言われるようになったわけだが・・・。

「景様。ご結婚されてから非常に弱気になっていると私は思います。言いたいことははっきりと言うべきです」

「っ!?!?・・・もしかして、景君は私に不満があるの?」

泣きそうに言われても困るんだよね・・・。

涙を見せるのは、妻の常套手段ではあるが適度に構ってあげないと本当に拗ねてしまうから見極めが大切だ。

場合によっては、人前で抱きしめなくてはならなくなることもある。あの時の恥ずかしい気持ちを忘れることは一生無いだろうな。俺が困っていると、達也が俺たちの間に割って入ってきた。

「ねえ、お父さん。もうすぐクリスマスだよ」

「そうだな。達也、奈津美はほしいものはあるか?」

俺は、達也の機転に内心ほっとしていた。

こういう話題なら妻の注意もそちらに向くだろうからな。

すると、子供たちはまるで示し合わせたかのように同時に口を開いた。

「わたし、もう1人弟がほしいな。達也に似てない可愛い子がいいな」

「僕はお姉ちゃんみたいじゃない妹がほしい」

「……」

それを聞いた俺と妻とエリスはお互いに顔を見合わせると固まってしまった。

だが、俺は3人の中で最初に立ち直ると子供たちと同じ目線になるようにしゃがむとしつかりと目を見据えて話しかけた。

「サンタクロースは、他人から子供を攫ってくるんだ」

俺があまりに真剣に話しかけたからだろうか。後ろでは、妻とエリスが噴き出して必死に笑いを堪えていた。

子供たちは、俺が珍しく真剣に話しかけるものだから聞いてくれているから、良しとしよう。

「お父さん、サンタさんがそんなことするわけないよっ！」

「そうだよ。サンタさんは悪くないもん」

だが、子供たちは聞いてくれているだけであり口を尖らせて明らかに不満そうにしていた。

まだサンタを信じているというのは純粹だと思うが、そろそろ信じるのをやめてほしいと思う。



親としてプレゼントを買って、さらにサンタとしてプレゼントを買うのは意外と出費が嵩むのだから。

・・・大人になるにつれて俺も随分と現実的になったものだ。昔は信じていた時期もあったんだがな。

俺は、内心溜息をつきながらも話を続ける。

「赤ちゃんはどこから来ると思う？」

・・・俺は一体子供相手に何聞いているんだ？

俺の後ろでは、妻とエリスが何とか笑いを堪えようとしていたが、我慢するのが面倒になったようでくすくすと笑っていた。

子供たちは俺の質問に少し考えると笑顔で答えた。

「お母さんが、このとりさんが運んでくるって言ってた」

「あー、わたしが言おうとしてたのに・・・」

俺は子供たちの予想通りの答えに満足して頷くと、さらに話を続けた。

「そうだな、コウノトリさんが赤ちゃんを運んで来るんだよな。じゃあ、サンタさんはどうだと思う？」

俺の意地悪な質問に子供たちは首を捻っていた。

2人は双子だから、当然一緒に生まれてきた。だから、母親のお腹に子供がいることを知ってはいない。

分からないなりに一生懸命考える姿は、とても可愛らしいし、将来が楽しみでならない。

「・・・サンタさんは、どうしてるのかな？」

「達也はそんなことも知らないの？わたし知ってるよ。あのね、お父さん。サンタさんも赤ちゃんを連れて来るんだよ」

力説する奈津美の目は本気だった。

昔の俺なら、即否定をしていただろう。

だが、今はそんなことはできない。

俺は、奈津美と達也をじっと見つめると静かに言った。

「じゃあ、コウノトリさんは必要なくちゃうな。サンタさんがそのお仕事したら、こうのとりのさんはいなくてもいいからな」

すると、奈津美がとんでもないことを口走った。

「どうして？サンタさんはクリスマスしか働かないニートだって、昨日お母さんが言ってた。ニートって何って聞いたらね、プレゼント配る人なんだって」

その言葉を聞いた俺は、とてつもない疲労感に襲われた。

元凶である妻とエリスの方に振り向くと2人とも俺から視線を逸らしていた。

どうやら2人で適当なことを吹き込んで楽しんでいたらしい。

俺は呆れつつも間違いを正そうと、奈津美の横に回ると少し離れた場所にいる人を指差した。

「奈津美・・・ニートっていうのは働かない人のことだ。ほら、あそこにいるだろ」

「あれがそうなの？達也、一緒に呼んでみようよ。せーの、二・・・むぐっ」

俺は咄嗟に2人の口を手で塞いだ。

見た目でそれっぽい人を選んだだけなので、もし違ったら・・・いや違わなくても失礼だ。

俺は、子供たちを俺の方に向かせると気を取り直して話を続けた。

「それに、サンタさんは、クリスマス以外の日はみんなにあげるプレゼントを作っているんだ。だけど、サンタさんは子供を作ることできないんだ。だから、どこからか攫ってくるんだ」

我ながら適当な嘘だな・・・。こんな嘘は信じてくれないよな。俺は子供たちの様子を伺った。  
だが、子供たちは違っていた。

「そうなんだあ」

「お父さん、物知りー」

その無邪気な笑顔を見てるとますます罪悪感に悩まされそうだ・・・。

俺は、子供を騙したことを後悔した。・・・今年は、少し奮発しないといけないな。

俺が、そう考えていると子供たちは妻たちの下へ駆け寄ると口々に言った。

「じゃあ、僕、このとりさんをお願いするよ」

「うん、わたしもお願いする」

「そうね。コウノトリさんに頑張ってもらいましょうね」

・・・こっちを見るな。それに俺はコウノトリじゃない。

だが、俺もバカでもないし、子供でもないから妻の言いたいことく

らいは分かる。

俺はどう答えるべきかと苦笑いを浮かべた。すると、妻は俺をじつと見つめると頬を少し赤らめながら周りを気にすることなく白昼から危険なことを口にした。

「・・・ねえ、景君。子供たちもこう言っているし・・・もう1人  
どうかな？」

・・・予想通りとはいえ、道端で言うことじゃないと思うんだが。  
周りに家族以外誰もいないことが唯一の救いと言えるだろうか。  
大胆な女も悪くはないが・・・場は弁えてほしい。  
俺は、妻からの期待の籠った視線を無視すると子供たちに向かって  
言った。

「・・・このとりが連れて来てくれるといいな」

「「うんっ」」

「うー」

妻は俺が無視したことにすっかりむくれていた。だが、子供たちは  
本当にコウノトリが運んできてくれると信じているのだろう。

・・・まあ、クリスマスが来れば忘れてくれるだろう。

俺は、溜息を1つつくと今まで会話に入ってこなかったエリスが俺  
に嬉しそうに言った。

「景様は幸せなのですね」

「そうだな。皆がいるからだだろうな。だが、エリス、お前も俺の幸  
せの中の1人だからな。これからよろしくな」

エリスは突然の俺の言葉にしばらく目をぱちくりとさせていたが、差し出した俺の手を握り返すといつもの笑顔を俺に向けた。

「はい、景様」

## Phase 7..アナザーエピログ（後書き）

アナザーエピソードを書きたいがために書き始めた作品もとりあえず完結です。

今考えるとアナザーエピログだけ短編にすればよかったのではないかと思います。

ちなみに、これはオーダーメイド本編とは別の可能性を描いたもので、まず主人公の妻は本編ヒロインではありません。

他にも書きたい話はありましたが、機会を見て短編として出したいと思います。

本編外伝にすると本編のコンセプトに反するので・・・。

最後になりますが、読んでくださった方々。

ありがとうございました。

次回短編は、巫女さん鬼ごっこを予定しております。

鬼ごっこだけど、あまり関係ないかもしれません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5697c/>

---

オーダーメイド異伝 パラレル・パラレル

2010年10月28日03時59分発行